



平成 29 年度
 アーティスト・イン・レジデンス研究会
 +
 トークショー報告書



はじめに

「アーティスト・イン・レジデンスについて考えてみませんか。」

アーティスト・イン・レジデンスとは、国内外からアーティストを招へいして、滞在中の活動を支援する事業をいいます。わが国においては 1990 年代前半から アーティスト・イン・レジデンスへの関心が高まり、主に地方自治体等の公的機関がその担い手となっています。

平成 29 年 9 月から 30 年 1 月にかけて国内の 4 つのアーティスト・イン・レジデンス運営団体（公益財団法人滋賀県陶芸の森、益子陶芸美術館／陶芸メッセ・益子、瀬戸市新世紀工芸館、京都芸術センター）で情報を共有するため、また、よりよいレジデンスの運営手法を確立し、さらにレジデンスの評価基準を明確にするための研究会を計 3 回にわたり開催しました。モデレーターには、アーティスト・イン・レジデンスの研究家であり、また実践にもかかわってきた、菅野幸子氏（AIR Lab アーツ・プランナー／リサーチャー）と日沼禎子氏（女子美術大学准教授）のお二人をお願いいたしました。また、併せて 4 つの団体の運営する AIR 事業に参加している作家によるトークショーも開催しました。

なお、本事業は文化庁「アーティスト・イン・レジデンス活動支援を通じた国際文化交流促進事業」補助事業として実施いたしました。これらの事業をとおして、アーティスト・イン・レジデンスが、日本の文化政策の文脈の中で定着し、より発展することを願っています。

主催者：公益財団法人 滋賀県陶芸の森

CONTENTS

はじめに	01
各館データ&研究会レポート	02
研究会の記録抜粋 課題・成果	11
アンケートデータ	14
今後の展望、課題解決にむけて	38
研究会スケジュール	43
編集後記	46

各館データ & 研究会レポート

滋賀県立陶芸の森



1 事業目的、プログラム事例

公益財団法人滋賀県陶芸の森は、“やきもの”という大きな主題を念頭に置き、創造・研修・展示等の多様な機能を持つ公園として、また、人・物・情報の交流を通して地域産業の振興や新しい文化創造の場とするとともに、滋賀から世界へ情報を発信することを目的に整備され、1990年に竣工、開設された。滋賀県の伝統文化であり主要な地域産業である信楽焼をベースとして「陶芸文化創造の世界的拠点」となることを目指し、自然の中での創造と遊び、文化と産業が一体となる機能を兼ね備えた施設を展開している。並行して運営をする陶芸館・信楽産業展示館・創作研修館の3つの施設は、県内外の方が陶芸に対する親しみと理解を深める場として存在し、これまでの管理や運営を行う過程で蓄積された情報収

集力、技術力を最大限に生かし、国際的かつ現代性を併せ持った魅力ある事業の展開を図り、陶器産業の振興、陶芸文化の向上に努めている。

1992年よりスタートしたアーティスト・イン・レジデンス（AIR）事業においては、作風や国籍の異なる作家が良好な交流を深めながら制作環境をともにし、充実した滞在制作を行うことのできる躍動的な共有スペースをつくることを目標とした。創作研修館という創作の場では、各作家がオリジナルのメニューを考案した上で、積極的な作品制作に取り組むことが可能となっている。

また、近年では、さらなる陶芸文化の向上、国際的な交流を図るため、AIR事業の一環として、文化庁の補助事業ならびに関西広域連合の受託事業を実施し、国内外のレジデンス機関との連携の強化を推進している。

住所：〒529-1804 滋賀県甲賀市信楽町勅旨 2188-7

電話番号：0748-83-0909

FAX：0748-83-1193

Website：http://www.sccp.jp/

2 成果、評価

陶芸の森では、これまで世界 52 カ国より延べ 1,226 名の作家が滞在制作を行い、数々の作品が発表されたが、その間、技術面や作家のサポート面においても常に研究と向上が行われている。その研究成果のひとつとして、作家の制作環境を整えることはもちろん、陶芸の森では、土の収縮が非常に少ない独自のブレンド土という大型の作品制作に適した土を開発し、陶芸の経験が浅い作家、陶芸家ではない現代作家でも柔軟に大型の作品制作に取り組むことが可能となり、確実な技術向上の成果を得られた。

AIR 事業においては、滞作家のスタジオを公開するイベント、作家や職員によるレクチャー、ワークショップ等を開催し、これまでの作家の受け入れ実績および地域社会への貢献を通じて、地域の方をはじめとする一般の来園者から高く評価されるとともに、常により良い環境整備、文化交流の向上に努めている。

3 課題

滞在制作を行う作家にとって心地良い制作環境を整える一方で、滞在期間を終えた作家の制作した数々の作品の保管及び管理は、大きな課題となっている。海外の作家の場合、作品の形状や大小に関わらず、輸送費が懸念されるので、作品を母国へと持ち帰るケースは少ないのが現状である。すでに作品を出展する展覧会が決まっている場合には、滞在制作後、作品はすぐに展覧会場へと搬入されるが、そうでない場合、作品の今後について検討をしなければならない。

作品の管理については幾つかの方法があり、ひとつは、滋賀県の美術館関係者を含めた収集審査会等を開催し、県の収蔵作品とすることである。収蔵作品となるのは、原則的には、ゲスト・アーティストとして招へいた作家の作品に限定している。陶芸の森の収蔵作品となれば、作品は収蔵庫にて保管をし、将来的には陶芸の森の陶芸館、陶芸美術館の企画展等で作品が展示される可能性がある。

もうひとつは、収蔵庫での保管が難しい性質の作品については、滞在期間中に作家と話し合い、作家の了承のもと、陶芸の森へ作品を寄贈いただき、園内の適した場所へ展示をすることである。園内では、屋外の他に、陶芸館のギャラリー、作業場前のギャラリーも展示可能なスペースとして設けられている。また、町内のギャラリーも展示場所の候補として挙げられる。園外での展示の場としては、県内の施設、公共の機関に作品を貸し出すという方法もあり、件数としては少ないものの、場合によっては、県内の施設等

に長期間にわたり作品を展示するということも考えられる。陶芸の森の施設内の物質的なキャパシティの拡大が難しい現状では、今後も作家の制作した作品の保管・管理について、相互にとって最良の方法を相談しながら、慎重に決定をする必要がある。

4 今後の取り組みについて

今後も国内外より優秀な作家の受け入れ、招へいを行い、作家の的確なサポート体制づくりを整え、やきもの産地特有の伝統的な要素と現代アートとの融合、交流を活性化させることを目標とする。その観点から、作家の制作スタジオを公開し、滞作家や職員によるレクチャー、ワークショップ等を開催する「創作研修館オープン・スタジオ」を強化し、人々の交流の機会を増やすことで、信楽焼の振興に努める。また、陶芸研究者による講演会等を開催し、陶芸の知識をレジデンス関係者や地域の方に教授する機会を設け、一般の来園者のみならず、産地後継者と作家の交流、双方のレベルアップのきっかけづくりを行う。

そして、現在の取り組みのひとつである、文化庁の「アーティスト・イン・レジデンス活動支援を通じた国際文化交流促進事業」の補助金を受けた国内外のレジデンス機関との交流プログラムについて、今後も継続的に実施し、さらなる活性化を図る。このことから、陶芸家の各所への派遣も含めた仕組みづくり、各国のレジデンス施設や国際的な陶芸の団体等のネットワークの拠点として、その機能をステップアップさせることを目標とする。

また、補助事業を活用し、海外のレジデンス機関への陶芸家の派遣、海外の陶芸関係機関からの陶芸家の受け入れを強化することにも着目したい。

陶芸の森では、信楽焼という特色ある地域資源の魅力を大切に、今後も、人々の感性、技術の幅を広げるとともに、そのネットワークを構築することにより、陶芸という伝統文化のさらなる発展、創造の未来を担う活動を続けてゆく考えである。

益子国際工芸交流館 / 益子陶芸美術館



1 事業目的、プログラム事例

益子陶芸美術館／陶芸メッセ・益子は、1993（平成5）年6月に開館した。以来、濱田庄司や島岡達三といった益子を代表する陶芸家や、濱田庄司にゆかりのある陶芸家の作品の収集、展示を行っている。また、濱田庄司と交流のあったイギリス人陶芸家バーナード・リーチをはじめ、リーチ工房初期の陶芸家の作品や欧米の現代陶芸作品も収集し、紹介をするとともに、近年は国内外の現代陶芸を中心に、年3～4回企画展を開催している。

また、益子町／益子陶芸美術館では、2014年5月より「益子国際工芸交流事業（Mashiko Museum Residency Program）」を開始した。

国内外で活躍するアーティストを招へいし、アーティストが益子で滞在制作を行う、アーティスト・イン・レジデンス事業を通じて、町外のアーティストと益子や周辺地域で活動する人々との交流が深まり、益子における陶芸（工芸）の伝統が広く国内外に共有され、また新たな創造の起点となることを目指している。

「益子国際工芸交流館」は、来町したアーティストが滞在制作を行う拠点である。益子で産出される芦沼石の粉を施した赤瓦を冠した平屋建築で、益子町出身の大塚実氏（株式会社大塚商会 創業者）の寄付に基づき、2014年春、陶芸メッセ・益子内に完成した。

住所：〒321-4217 栃木県芳賀郡益子町益子 3021

TEL：0285-72-7555

FAX：0285-72-7600

Website：http://www.mashiko-museum.jp/

2 成果、評価

益子陶芸美術館／陶芸メッセ・益子では、2014 年より海外作家の受け入れを開始し、2016 年までに陶芸家 5 名、染色家 1 名を招へいし、2017 年春には本事業初の公募作家として、デンマーク陶芸家アン・メテ・ヨォーツォイ、イギリス在住のブラジル陶芸家カリナ・シスカートが滞在制作、記念講演会、制作実演を行った。

アン・メテ・ヨォーツォイは、滞在中、町内の採土場で掘った土や原土、益子の伝統釉を使用し、普段から制作する刷毛目や、土で自作した植物型のスタンプで模様をつけ、ティーポットや茶碗等を制作し、岩見晋介氏の穴窯、松崎健氏の織部窯、濱田窯の登り窯でも作品を焼成した。

3 課題

運営上の課題は大きく 3 つある。

1 点目はレジデンスの時期についてである。レジデンスは春と秋の年に 2 回実施しているが、同時期に益子陶器市が開催されており、益子の販売店、陶芸家が忙しい時期でもある。そのため、公開制作、ワークショップ等を開催しても参加者が少ないという問題がある。

2 点目はマニュアル化についてである。交流事業の工房担当は 1 名しかおらずアーティストの作品制作の進行が滞ることがある。また、タイムスケジュール、シフトが組みづらいといった問題点もある。材料リストの作成など、余裕をもった対応ができるよう、アーティストがスムーズに制作を行えるように改善していきたい。

3 点目は材料や技術の問題である。益子の材料をできるだけ制作に活用してほしいという願いはあるが、それが難しいのが現状である。また、アーティストの普段の技術を生かしてもらいたいが、材料が違えば同じ技法が通用しないという問題がある。

事前に材料についての打ち合わせ（原料の一覧表等で確認をとる）を行うが、同じ名前の材料でも性質が異なる場合がある。

4 今後の取り組みについて

今後取り組みたい活動は大きく 4 つある。

1 点目は栃木県の窯業技術支援センターとの協力体制をとること。将来の陶芸家の本事業への参加を促したい。

2 点目は Facebook での広報をこまめに行うこと。こまめに情報をアップしたところ来場者がアップしたという結果があるため、毎日 1 回を目標に更新していきたい。

3 点目はマニュアル化をすること。技術と情報を共有しながら、アーティストへ余裕のある対応ができるよう、改善していきたい。

4 点目はレジデンス施設での巡回展を開催すること。現在は収蔵作品の数が少ないため、今後、ある程度の作品数が収蔵されてゆけば、お互いのレジデンス施設での巡回展を開催することも実現できる。また、アーティストの派遣も行いたいと考えている。

瀬戸市新世紀工芸館



1 事業目的、プログラム事例

瀬戸市新世紀工芸館は、これまでの瀬戸のまちの特性を生かした上で、新世紀の産業・芸術・文化の発展を図ることを目的として1999年に開館し、施設は展示棟、交流棟、工房棟からなり、研修生の受け入れ、各種企画展、イベント等に活用されている。

それぞれの棟の役割としては、まず、展示棟には3つの展示ギャラリーを設け、企画展示を中心に、常に新しいかたちで創作に取り組むアーティストの活動を紹介している。交流棟では、陶芸・ガラス工芸の情報コーナー、カフェコーナー、作家の作品を展示販売するギャラリーを設置し、様々な「ひと」と「もの」、「情報」の交流を行う施設となっている。最後に工房棟は、陶芸・ガラス工芸の創作研修を行う工房から

なり、それぞれの工房で研修生を受け入れ、カリキュラムのない自由な創作活動を通じて、研修生の新しい試みや創作を支援している。

2000年より海外の作家の受け入れ、アーティスト・イン・レジデンス（AIR）プログラムを開始した。プログラムでは、国外の優れた陶芸家とガラス作家を招へいし、瀬戸の永い陶芸の歴史とガラスの原材料（珪砂）の産地であるという特質に、世界で活躍する作家が加わることで、市民や瀬戸市および周辺地域で活動する作家等との交流を深め、陶芸・ガラス芸術の新たな展開が生まれること、そして芸術的感性と国際感覚豊かな地域づくりを目的としている。

住所：〒489-0815 愛知県瀬戸市南仲之切町 81-2
電話番号：0561-84-1093

FAX：0561-85-0415

Website：http://www.seto-cul.jp/

事務局：〒489-0884 瀬戸市西茨町 113-3

2 成果、評価

瀬戸市新世紀工芸館では 2000 年より海外の作家の受け入れを開始し、以来世界 24 ケ国、64 名の作家を受け入れてきた。受け入れ作家数は決して多くはないが、滞在中のケアから滞在後のコミュニケーションに至るまで、密に受け入れ作家と関わっている。

また、作家の滞在中は市民や瀬戸市および周辺地域で活動する作家と滞在作家が関わる機会を提供することで、瀬戸に住まう人々、歴史ある“せともの”の作風などを感じながら、作家が新たな作品を創造するサポートを行っている。これらの活動を通じて、文化交流と新世紀にふさわしい陶芸、ガラス等の工芸文化の新たな展開を図っている。

3 課題

招へい作家は瀬戸市内に居住しながら瀬戸市新世紀工芸館の工房棟に通うため、美術館に常駐している作家の担当者と技術的な面でのサポートをする工房棟の担当者が毎日の出来事を共有することで、作家が快適に制作活動に励めるように環境を整えている。このようなサポートの一方で、産地における AIR の可能性、役割の面で課題がある。

まず課題について述べる前に、産地における AIR の大きなメリットについて触れておきたい。それは産地ではない AIR と比べて、圧倒的に技術や培ってきた知識があるということ、さらに材料も豊富であるため、自国で出来なかった手法等を作家が行うことが可能となった。作家が新しいことに安心して挑戦することができる環境は、プログラム終了後の AIR の満足感に直結してくるだろう。しかし、産地の AIR にはデメリットも存在する。それは、運営側が産地のもの以外の素材を利用した作品を扱うことに関しての抵抗感を感じてしまうことである。例えば、産地のもの以外の作品を瀬戸という場所で展示する理由や意義などを問われることが多く、そのため、積極的に産地以外の作品を扱うことが減り、結果、受け入れない方針であるように据えられてしまう。

また、産地における AIR の役割については、事業開始当初、芸術文化による国際交流を目的として挙げていた。現在は長期の AIR 事業は行っていないものの、役割自体が時代や人によって変化していると感じている。その一つに挙げられるのが行政の考え方である。以前は、国際交流は当然のように良いことであると考えられていたが、現在では、国際交流にどのような意味があるのか、姉妹都市を結んでどのような効果が得られたのかを問われるようになった。つ

まり、国際交流に資金を費やす意味があるのかを問う流れが生まれてきている。

AIR にはこれらの課題を、様々な人々と一緒に考えていく必要があるのではないだろうか。運営側が変化していく流れを読み取り、改めて AIR のメリットや役割を再確認することが、これからの運営のために必要である。

4 今後の取り組みについて

これまでの研究会を踏まえると、それぞれの AIR ごとに歴史や状況も異なる、目的・役割や最終的に見据えている方向性も少しずつ異なっている。しかし、AIR の根本に関して考えていることは変わらないのではないかと感じている。

今後は AIR 自体がどのようなものなのかということを運営側が深く理解をし、それぞれの意義を当てはめ、言語化していくことが非常に重要になってくる。そのためにもそれぞれの AIR の動きを情報として共有し、広げていくことができれば、実例を踏まえて産地における AIR について考えていくことも可能になるだろう。

また、瀬戸市新世紀工芸館では現在は長期的な AIR 事業を行っていないこともあり、AIR 自体を経験していない運営スタッフもいる。現場での経験の差が有るスタッフが実際の現場で作家の支え方を考えていくために、今回のような研究会は今後さらに必要となるだろう。そして、経験のあるスタッフも含めて、研究会を通して自分たちの原点について見直しを繰り返すことで、AIR の言語化という部分が進んでいくと考えている。

京都芸術センター



1 事業目的、プログラム事例

2000年4月に京都市により開設された京都芸術センター(KAC)は、京都市と芸術家および芸術関係従事者が連携し、京都市における芸術の総合的な振興を目指して積極的に活動を展開している。

KACの主軸となる活動は、3つの柱に分けられる。第1に、ジャンルを問わず若い世代の芸術家の創作活動を支援すること、第2に、様々なメディアを用いて芸術文化に関する情報を収集および発信すること、第3に、芸術家と市民、あるいは芸術家相互の交流を促進することである。

その具体的な事業として、展覧会や茶会、伝統芸能、音楽、演劇、ダンス等の舞台公演や様々なワークショップ、芸術家・芸術関係者の発掘と育成、伝統芸能の継承、創造を目指す

先駆的な事業、作品制作や練習の場である「制作室」の提供、また、国内外の芸術家の活動支援等を行うアーティスト・イン・レジデンス・プログラム(AIRプログラム)にも意欲的に取り組んでいる。このような活動を通して、KACは、京都が持つ優れた芸術文化の伝統や蓄積を現代に生かし、京都の広範な学術的風土を背景として新たなヴィジョン創出のための実験的な試みを可能にし、新しい時代における都市文化の創造拠点となることを目指している。

住所：〒604-8156 京都市中京区室町通蛸薬師下る山伏山町 546-2

電話番号：075-213-1000

FAX：075-213-1004

Website：<http://www.kac.or.jp>

2 成果、評価

KAC のこれまでの取り組みのひとつに、京都市立芸術大学との連携プロジェクトがある。KAC と京都市立芸術大学は、2011 年度より 5 年間にわたり、共同で AIR プログラムを実施した。アメリカ、韓国、タイ、スペインより 5 名のアーティストを招へいた本プログラムの特徴は、芸術教育・研究機関である京都市立芸術大学と、京都の文化拠点である KAC という 2 つの組織が連携し、両者の強みを生かしたアーティストのサポート体制、創造における交流を行ったことにある。京都芸術センターがこれまで培ったレジデンス運営のノウハウと地域のネットワークを最大限に生かし、大学からは芸術・学術の専門知識や設備等のリソースを提供する。両者の協力によって、アーティストの様々な要求にも柔軟に応えることが可能となり、国際的にみても質の高い AIR プログラムとなった。

KAC と大学が AIR という大きな枠組みとアーティストの創作活動を通して活発に繋がり、協働することで、双方の活動に良質な刺激をもたらすことができた。両者が連携してアーティストを支援することにより、芸術家、研究者、学生から一般市民まで、幅広い層に向けた芸術による国際交流の実現が可能となったのである。

招へいアーティストは KAC と芸術大学の両方を行き来し、KAC では滞在制作および成果発表を行い、芸術大学ではレクチャーやワークショップ等を開催した。京都の若手アーティストやボランティアスタッフ、学生や大学の教員まで幅広い方々との交流を深められたことは、アーティストにとって、より重層的に京都という都市を知るための手がかりとなったようである。また、当時アーティストのサポートやアシスタントを担った学生たちは、時を経て、現在では自身がアーティストや文化芸術に携わる人材として、KAC をはじめ国内外にて活動の場を広げている。学生時代の国際的な経験が現在の彼らの活動の支えとなっているとすれば、継続して進めた本プログラムの大きな成果のひとつといえるのではないだろうか。

3 課題

KAC が開館当初から継続して取り組んでいる AIR プログラムは、芸術分野のアーティスト、研究者等が京都に一定の期間滞在をしながら、創作・制作活動や交流を行うプログラムである。異なる文化に触れることによって新しい芸術表現を生み出そうとする新進のアーティストや若手のアーティスト、芸術分野の研究者等を対象として、創作活動の支援を行っている。

KAC の AIR プログラムは、公募プログラム、海外のレジデンス施設との連携プログラムに分かれている。開館当初よりスタートした公募プログラムについては、パフォーミング・アーツ、ビジュアル・アーツの 2 つの分野のアーティスト

を対象に隔年のサイクルで交互に募集を行い、毎年、1 名ないし 1 組のアーティストの選考を実施している。次年度に滞在制作を行うアーティストを前年度に募集し、選考を行う公募プログラムである。昨年のビジュアル・アーツ分野の応募件数は約 150 件ほどであったが、パフォーミング・アーツ分野については、例年、ビジュアル・アーツ分野と比較をすると応募件数が少ない傾向にある。しかし、今年度より応募書類の受付システムを変更したことにより、応募件数が爆発的に増加し、様々な国のアーティストからの応募が多く見られ、国際色が豊かになる一方で、選考の重要な過程ともなる事務処理が追いつかず、何かしらの対策を練らなければならない状況にある。新しい芸術の可能性の幅を広げるためには、アーティストの受け入れシステムの効率化と向上について、今後も検討を重ね、改善に努めたいと考えている。

4 今後の取り組みについて

連携プログラムについては、昨年度よりエクスチェンジを開始し、海外からのアーティストを KAC へ受け入れると同時に、京都のアーティストも海外の連携施設へ派遣を行い、アーティストを相互に派遣することで、より充実した滞在制作ができるよう、サポート体制を整えている。

コンテンポラリーダンスの専門施設であるソウルダンスセンターとの連携に加えて、アートスペースというシドニーの現代美術の施設との連携も開始し、相互にアーティストを派遣している。アーティスト、都市間のネットワークを構築し、滞在するアーティストへのサポート体制の質の向上と、交流によって新たな芸術表現の可能性が広がることを目標に、今後も継続して意欲的に取り組みたいと考える事業のひとつである。

また、KAC は、芸術文化に関する創造・制作の現場であると同時に、広くその成果を発表する場を提供している。その一例として、ニューイ・ブランシュ KYOTO 2017 や東アジア文化都市 2017 京都「アジア回廊 現代美術展」という京都市内にて開催されるアートイベントに合わせてアーティストを招へいし、パフォーマンスや作品を出展すること、また、イベントに関連する展覧会を企画すること等、各アートイベントとの連携プログラムにも力を注ぎ、芸術文化の交流、情報の発信に努めている。今後もこのような取り組み、活動を継続し、芸術分野において、より生き生きとした創造の拠点となることを指針としたい。

研究会の記録抜粋 課題・成果

研究会の記録抜粋：成果、課題、今後の取り組みについて

3 回にわたって開催した研究会では、各館の担当者より活動実績等のプレゼンテーションの後、テーマに沿った議論、意見交換を行ってきたその中から、成果、課題を抜粋して掲載する。課題に対する取り組みについては、Q&A 方式でとりまとめた。技術、職人、公開・交流の形やリスク管理、作家と AIR 拠点の双方の成果について。また、成果を出すためのサポートに対する考え方も、陶芸の産地ならではの特徴、あり方が見えてくる。

【成果、評価】

- ・やきもののプロフェッショナル同士のフレンドシップこそが、AIR の成果、評価である。
- ・作品を美術館に寄贈してもらうために、いかに良い作品をつくってもらうかが第一目標。お互いにクオリティーコントロール、一定のレベルを求めている。
- ・さまざまなやきもの、やきもの文化を伝える役割。
- ・アーティストによる特殊学校に向けた陶芸の指導、交流を行なっているが、指導したアーティストの方が感激したというエピソードがあった。
- ・有料アーティストからの収入があり公益財団としては優良な運営。

【課題とそれに対する取り組みについて（討議の抜粋）】

アーティストにとっての AIR の成果、評価

Q

AIR による成果として、滞在アーティストの満足度を上げるには。例えばアーティストが扱いたい素材や、試したい技法が多すぎる場合、テストをしている間に時間がたってしまう。

アーティストが普段使っているものと違う原料で結果を出す必要があるという難しさ。地場の原料を使って制作していただきたいが、原料は同じでも性質に違いがある。いつもと同じ技法を使えず目的を実現できないこともあるため、その点を解消したい。

A

- ・ものをつくりあげるための材料、技術が産地にそろっているというのは大きなメリット。海外のアーティストが、自国ではできないこと（大きさ、素材、スタッフからのサポート）を実現することで満足感を与えることができる。
- ・アーティストが望む成果を目指すためには、表現したいこと、試したいことがあってもロジスティクスに現場が（必要な技術や素材を）判断する必要もある。感性はアーティスト、実際の作業は職員がプロとともに伝える。逆に、その手法はやめたほうがよいと指導しても良いものになる場合もあり、それが励みにつながることもある。
- ・アーティストを材料屋に最初に連れて行かず（見ると使いたくなるため）、作りたいものによって素材を推薦する方式にした。
- ・アーティストによっては制作作業の優先順位を指導し、その他、試したいことは時間があき次第後で行うよう助言。
制作に失敗したケースもあり、これまでは幸いシリアスにならずに終わったが、最終的には作家と話し合い、こうしたいという熱い想いがあればそちらを選ぶようにしている。
- ・作品の成果を出すためには、最低でも 1-2 ヶ月の滞在が望ましい。
- ・作家により良い成果を得られるような環境づくり。
- ・現代美術、現代陶芸の作家のための技術が必要。
- ・大型作品用の土の開発。切れたり割れたりせず、現代美術作家の作品も制作できるようになった。
- ・金山焼の再現窯、スイッチバックキルンの築窯。
- ・地元の交流協会になげかけ、主導的に交流事業をおこなってもらう。作家によって似通っている人がいれば、紹介する。技術等を地元作家を通して学ぶことも多い。

Q

アーティストから、地域について知りたいという要望が多い。

A

- ・オリエンテーションの日を設けている。さらに、その他の地域や街の中での文化体験ができるとよい。
- ・アーティストにできるだけ地域を知ってもらうために、昔の登り窯の見学や、土の採取場所を尋ね、石を掘る等、町内見学をする。

AIR 運営側の成果、評価

Q

行政と現場の成果・評価の考え方、特に（成果が顕在化されるまでの）時間軸の違いがあるため、双方の目的が合致した助成金を得ながら、さらに文化の分水嶺というべき、現場の独立性をどのように保つことができるか。

A

完成した作品の質、活動を知ってもらうための広報、行政目的について、担当者がきちんと伝えることができるかどうか。AIR は多くの人がのぞむ事業ではないことを踏まえた上で、その目的をきっちりとらえて、何をどこまですべきか、担当者が説明できる力、熱意を持つことができるか。

時代が変化する中での AIR の役割、変化

Q

当初は行政の国際交流事業の役割を担っていたが、プログラムが終了すれば、役割が終わってしまうこととなる。自分たちで、役割をもう一度とらえなおす必要がある。

A

- ・AIR を通した人と人との交流、産業の地位向上にむけた役割へと変わってきているのではないかな。
ものづくりの現場、アーティストが街の中にいるか、いないかでは大きな違いがある。どのような効果があったかエビデンスを集め、戦略的に評価につなげることが必要。
- ・産業とのダイレクトな結びつき。（AIR によって新しい商品の）プロトタイプはできても、実際に販売に至るには困難。産地のメーカーとアーティストとが、今後どのようにビジネスを展開していくかをともに考える必要がある。

Q 新しい戦略的な取り組みはないか。

A 海外からのサマースクールの研修生、ホームステイ型の陶芸体験の滞在受け入れ（有料）等は、今後の需要があるのではないかな。

Q

アーティストのエピソードをどのようにして評価につなげるか。

A

- ・例えば評価の一考察として、1952 年に Archie Bray Foundation により、柳、濱田、ピーター・ヴォーコス（Peter Voulkos、ギリシア系アメリカ人で現代陶芸の創始者の存在）が出会ったことの重要性があげられる。East meets West という中で、ルチオ・フォンタナやジャクソン・ポロックと濱田庄司との技法（かけながしとドロッピング）の比較、検証等、長い時間の経過後に、分析できるエピソードを集めることも有効ではないか。
- ・滞在アーティストのデータベースづくり。

Q

ネットワークを通じた成果、評価の研究のあり方

A

- ・各館で、AIR の成果作品の収蔵がある程度まとまった際に、お互いの収蔵作品を展示する巡回展を行うとともに、各施設を作家（アーティスト）にも巡ってもらおうと良いのではないかな。
- ・技術、情報、経験を共有するためのマニュアルのようなものをつくると良いのではないかな。

Q

伝統産業が盛んな地域であるため、近年 AIR を結びつける試みが行われた。このプログラムでは、伝統産業の側からの提案により、新製品の開発と販売にゴールが設定されている。これまでの AIR では（ゴール、成果は）アーティスト主導で行ってきたので、アーティストの要望に応じて制作のプロセスをアレンジしてきた。ゴールの設定が異なるものを、どこまで合わせていけるのか？というなれば、言語の異なるもの同士、どこで調整あっていくのか、どこまで妥協していけるのか。

A

- ・クラフトと現代アートのゴールを必ずしも一つにする必要はないのでは。例えば金沢では伝統工芸の若手の作家たちがおもしろく、九谷焼の技術研究をベースに新しい作品を制作している例もある。
- ・新製品を開発できたとしても、一定の量産を保った販売を行うには、作家と販売者の目標設定の違い、権利関係等法的な面も含めて、さまざまな課題がある。出口（契約、生産・販売ルート）の設定をしないままの開発は難しいのではないかな。

Q

交流プログラムを行う場合、アーティストの制作が佳境の際に作業の手をとめてしまうトラブルがおきる。どのような交流のあり方が望ましいと考えられるか？

A

- ・陶芸に限らず食事会や住民宅訪問等の交流の必要性。
- ・「FUJIKI」というまちなかの拠点を、陶芸の森スタッフも実行委員会委員として積極的に関わり、地域おこし協力隊との連携により運営している。そこでは、陶芸の森の一部成果展の実施、町民にも一部貸し出しをしている。新しい事業を地域で立ち上げることは難しいが、行政ではなく、できるだけ民間が表に出ていく形になれば、満足感につながらない。
- ・海外（ヨーロッパ、アメリカ、アジア）のレジデンスとの連携強化。
- ・小中学校、窯業技術支援学校との協力、連携。

Q もっと多くの地元の陶芸家からの参加、理解を得たい。

A 海外アーティストによる、日本ではあまり行わない技法を紹介する公開制作、ワークショップの実施を行うと良い。

活動拠点

Q 研修生と AIR アーティストが同時期に制作をする場合、良い環境を一緒に作ることができる場合と、邪魔にされてしまう場合がある。

A 研修生と AIR アーティスト双方に対し、目的、制作環境に対する相互理解のための、現場での橋渡しが必要。

Q 美術館と AIR との連携が十分にとれていない。プログラムが多様化しすぎて、手が回らない。

A

- ・美術館学芸員は AIR スタッフより陶芸に詳しい。美術館のあるべき姿、ビジョンの共通認識を持つことが、AIR 事業の発展につながるのではないか。
- ・AIR 事業のマニュアルづくり。

一般に向けた広報・宣伝・交流

Q

AIR 自体の広報が十分に行われていない。若手や常連ではなく新しい参加・観客層に対して、どのように興味をひくことができるか。

A

- ・印刷物作成にあたり、デザインの統一、アイコン化して伝えやすいようにし、まちなか、関連する各所に置いてもらっている。
- ・Facebook 等の SNS 上で頻繁に情報をアップしている。
- ・学校訪問等により、地域との良い関係をつくる。
- ・海外領事館、大使館との連携。
- ・現地以外の東京、名古屋等でも成果報告の展示会を開催し、広く成果を発信する。
- ・ワークショップ、学校訪問、展示会、フェスティバル等、さまざまな方に参加してもらうことで理解を促進する。
- ・交流事業実施日についてアンケートをとった結果、平日が良いという意見が 80% であった。現在、土日はワークショップ、平日はオープンスタジオを実施している。

Q 作家が滞在してみないとわからないことが多く、日程のみの広報となり、詳細な情報を掲載できない。

A 制作内容について事前に打ち合わせをする等のやりとりを事前に行うことで、情報を収集すると良い。

人材、経験不足への取り組み

Q

- ・交流担当（現場）が一人しかおらず、休むとアーティストの手がとまってしまう。
- ・当館では AIR アーティストに対し 1 名が担当となり、租税条約から、技術指導、展示会広報までをすべて対応している。アーティストの要望を吸い上げながら密に行うにはいいが、一人では限界がある。各館ではどのように役割分担を行っているのか？

A

- ・主担当は配置するが、スタッフ間で情報共有をし、総務課も関わる形で年間 40-50 名を対応している。例えば工房担当の他、館外でのリサーチには嘱託のスタッフが行き、外部のネットワークの中からマッチングしていく場合もある。
- ・アーティストへの日常的な対応は工房のスタッフが担い、財団の職員との交換日記で情報共有をしている。外部でのリサーチは、コーディネーター部門が行う。
- ・同じ事業を抱えている拠点とのネットワーキングにより、課題を共有し、議論することが大事。互いの現場での研修制度等年に 1 回でも実施できると良い。

アンケートデータ

アーティスト・イン・レジデンス事業の運営に関するアンケート調査について

下記の要項にもとづいて行った調査の結果をグラフおよび表にまとめ記載した。

質問項目の中の「Q13. 特に成果があったエピソード、想定外の効果があったエピソード」(p.34-35) および「Q.15 その他の課題」(p.36) については回答内容のみを抜粋して掲載した。

< AIR 事業実施団体へのアンケート調査実施要項 >

目的

アーティスト・イン・レジデンス事業の運営についての研究会で検討する「レジデンス運営にあたっての実務的な課題の抽出とその課題に対する答え」を見出すことを目的にする。

実施期間

平成 29 年 6 月後半～7 月末まで

アンケート対象の団体

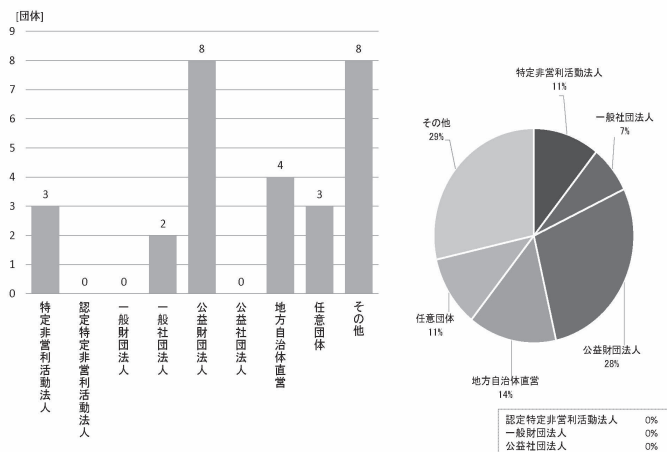
- ・ 今回の AIR 研究会に参加する 4 機関（陶芸の森含む）
- ・ 昨年度、開催した国際シンポジウム「関西アーティスト・イン・レジデンス」の
参画機関 10 機関
- ・ AIR-J に登録している AIR 機関 60 機関

合計 74 機関

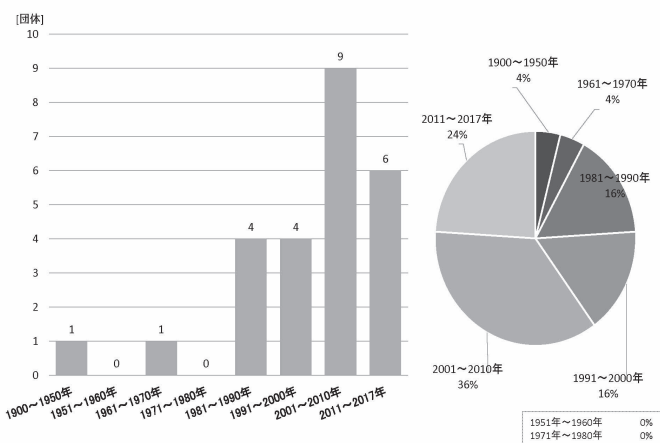
アーティスト・イン・レジデンス事業の運営に関するアンケート結果

2017年7月1日～7月25日 送付数：68 / 回答数：28 / 回答率：41%

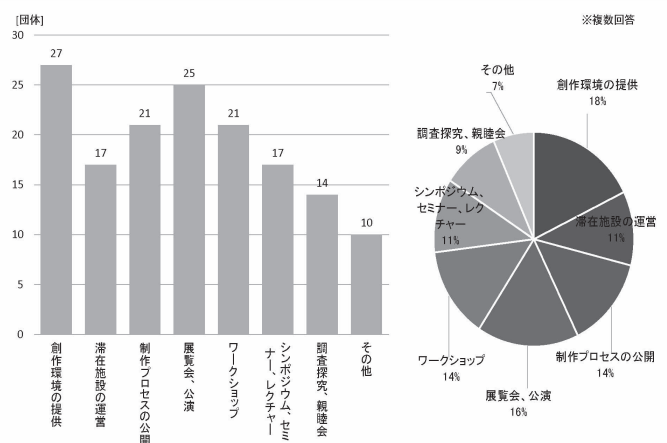
Q2.事業運営団体【法人格】



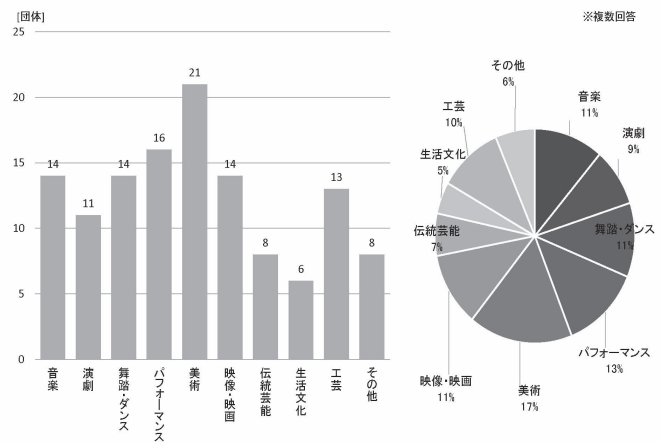
Q3.事業運営団体【設立年月】



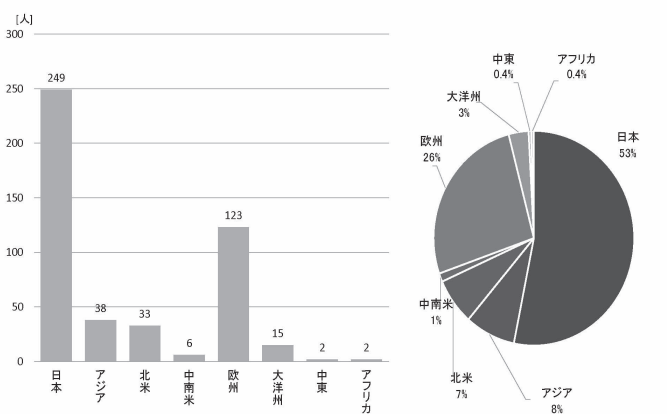
Q5.事業運営団体【事業内容】



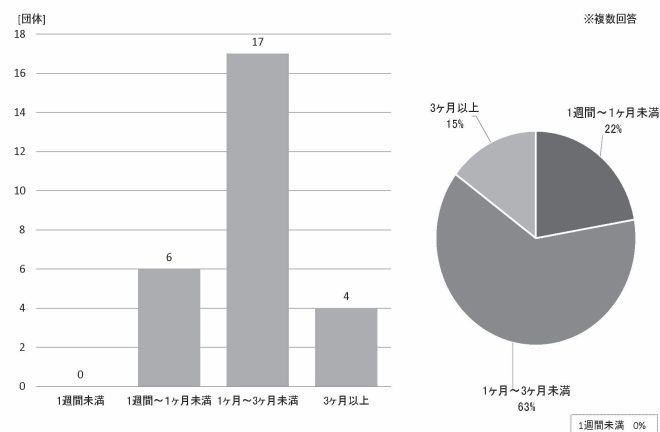
Q6.事業運営団体【対象分野】



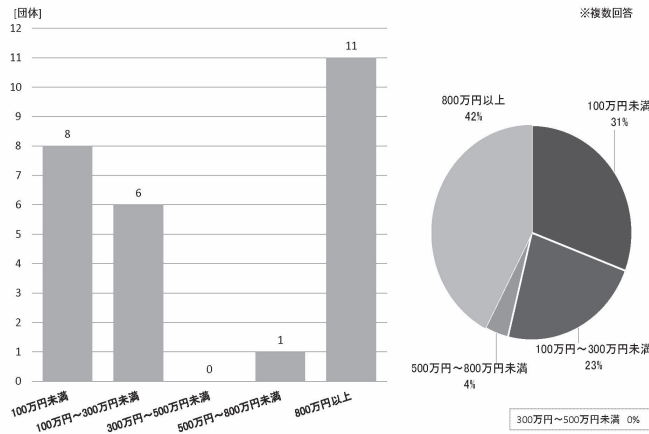
Q7.2016年度の活動【アーティストの出身地域】



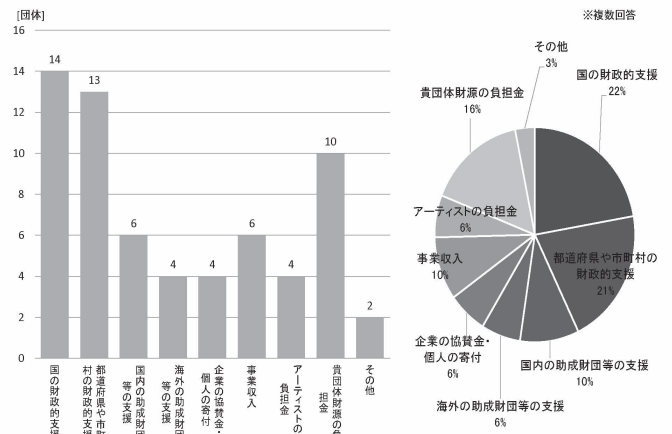
Q8.2016年度の活動【アーティストの平均滞在期間】



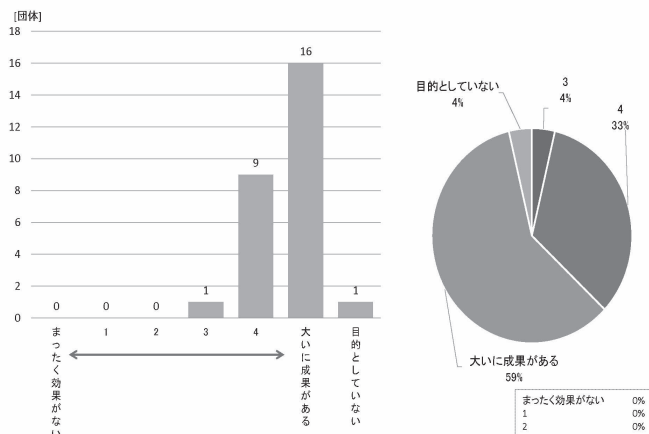
Q9. 2016年度の活動【事業経費】



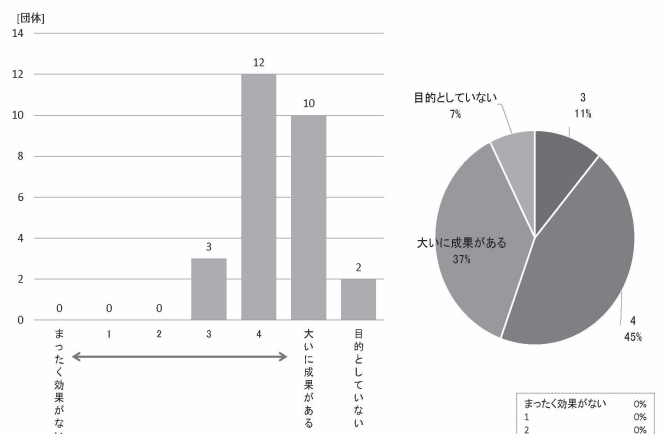
Q10. 2016年度の活動【財源】



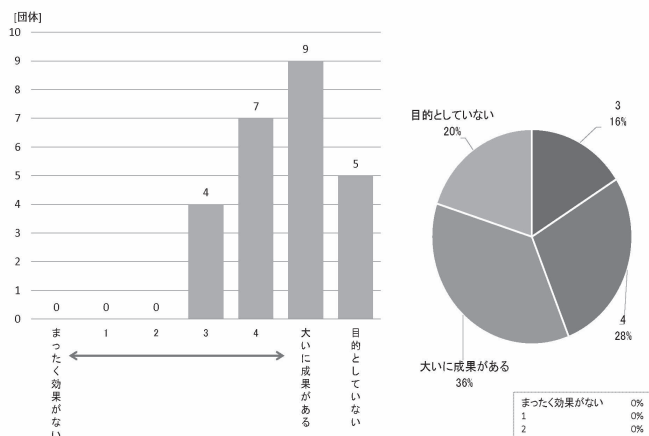
Q11①. 事業の成果【アーティスト自身の作品の創作】



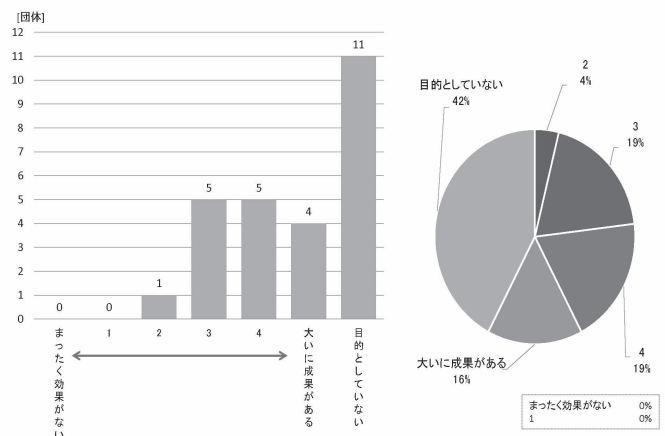
Q11②. 事業の成果【アーティスト自身の作品の発表】



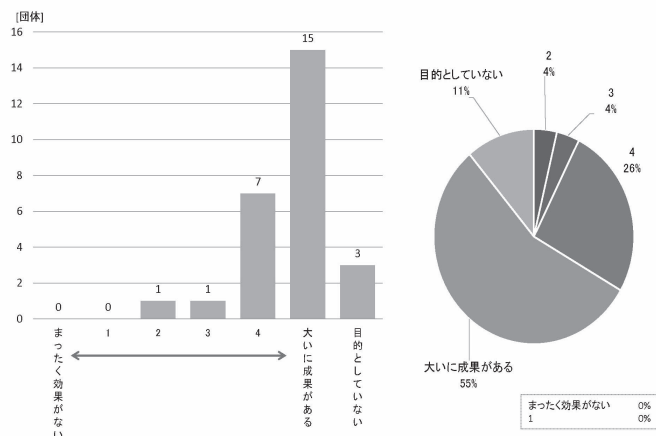
Q11③. 事業の成果【アーティスト自身の作品の調査や研究】



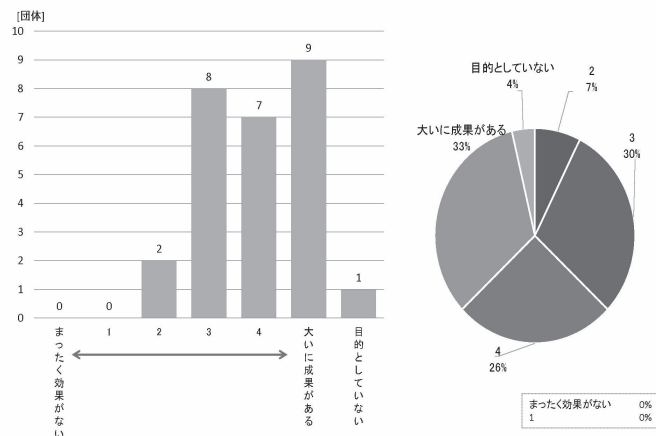
Q11④. 事業の成果【アーティスト自身の休暇や保養】



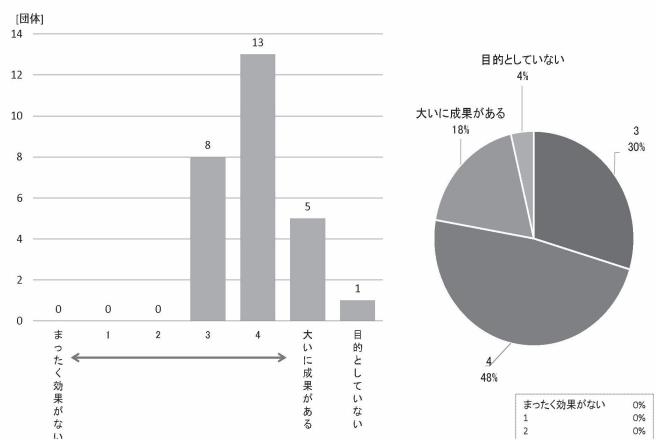
Q11⑤.事業の成果【アーティストの相互交流】



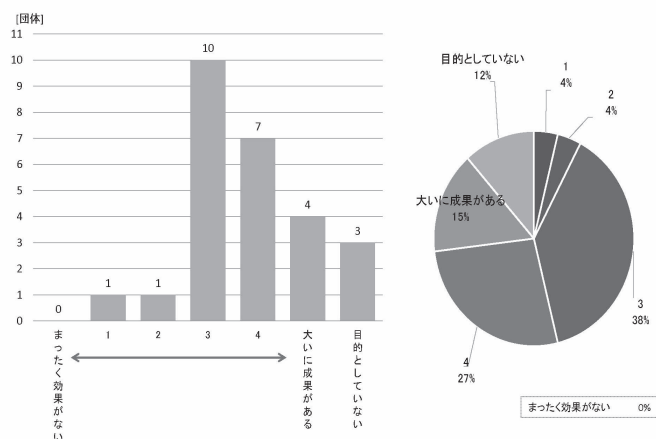
Q11⑥.事業の成果【地域住民との相互交流】



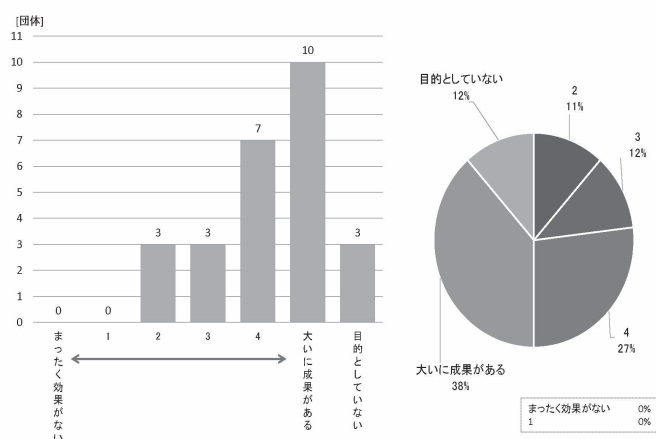
Q11⑦.事業の成果【文化・芸術の振興や普及】



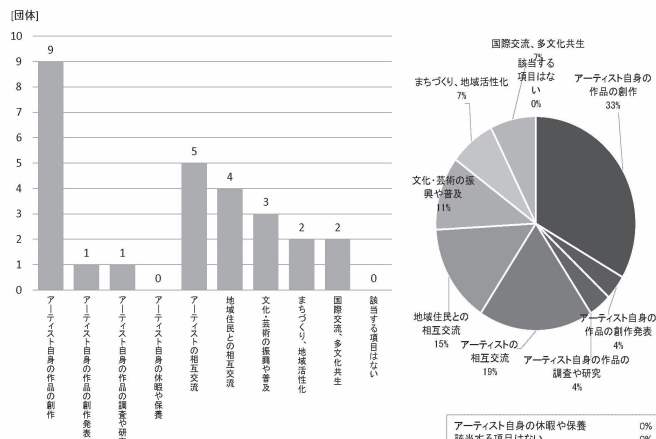
Q11⑧.事業の成果【まちづくり、地域活性化】



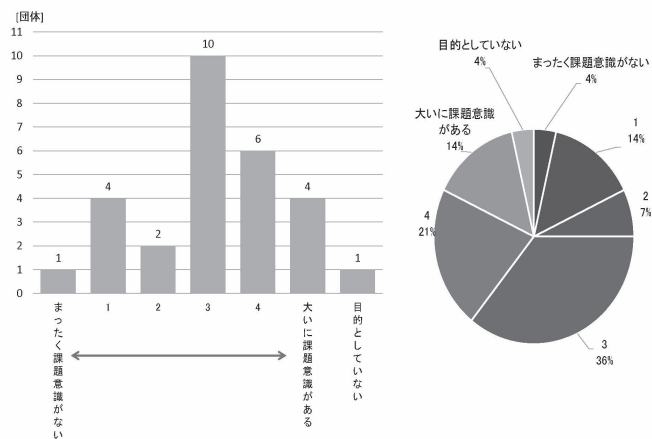
Q11⑨.事業の成果【国際交流、多文化共生】



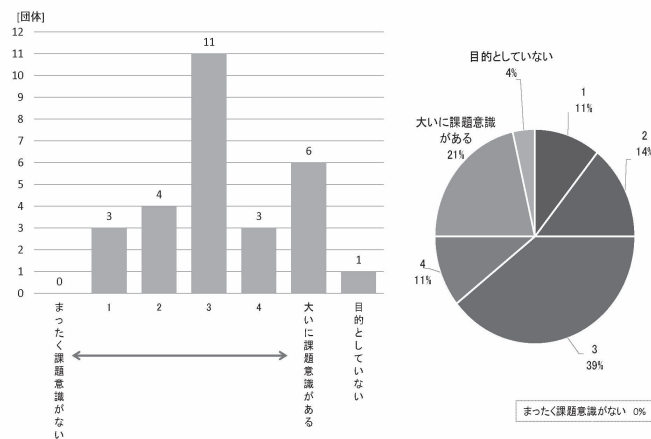
Q12.事業の成果【最も効果のある成果】



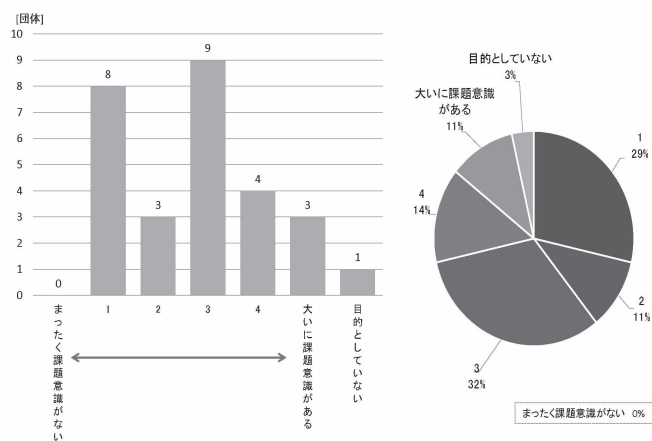
Q14(1)①.事業の課題【施設の広さや室数の不足】



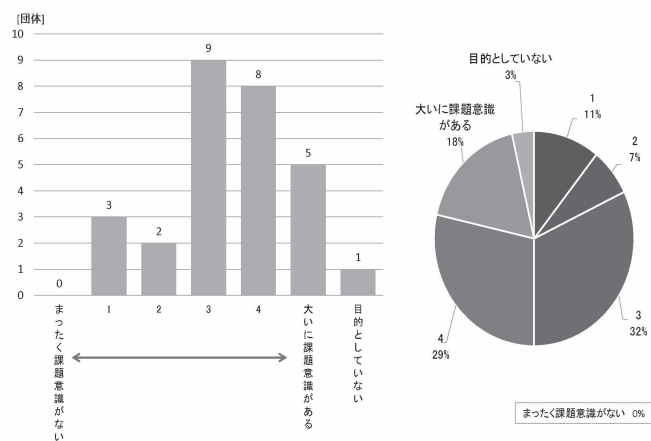
Q14(1)②.事業の課題【必要な設備や備品の不足】



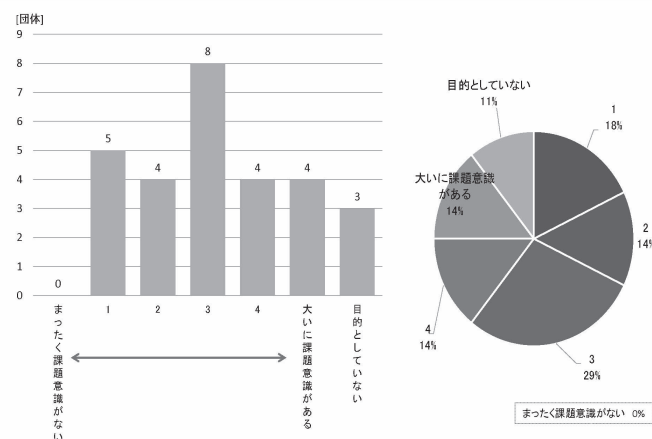
Q14(2)①.事業の課題【専門知識の不足】



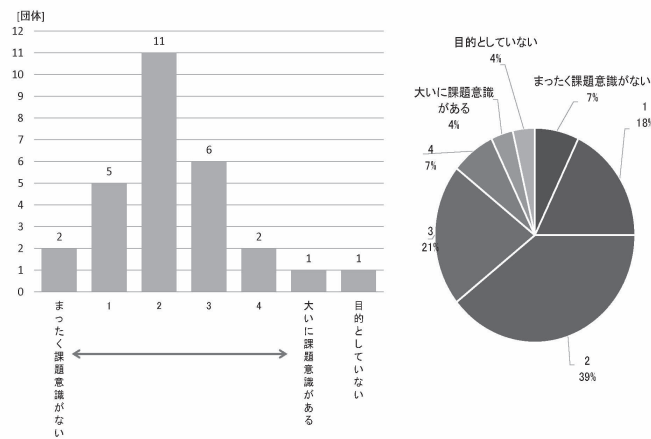
Q14(2)②.事業の課題【コーディネート人材の不足】



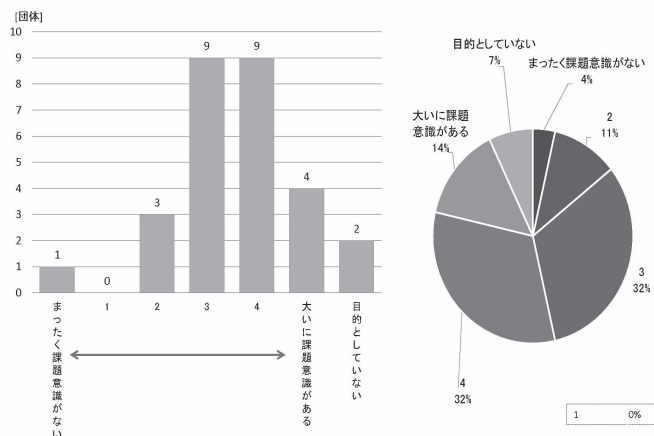
Q14(2)③.事業の課題【外国語能力の不足】



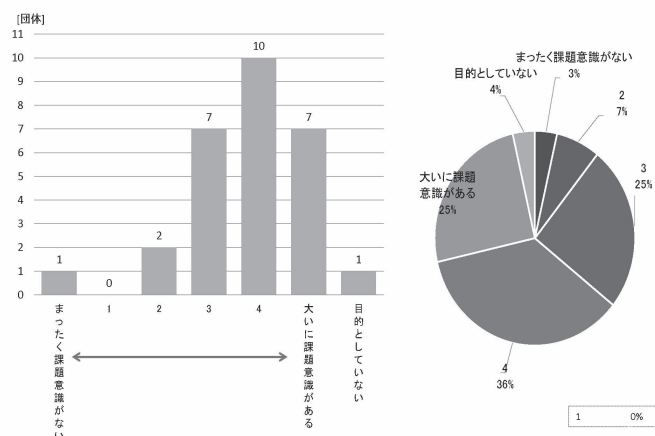
Q14(2)④.事業の課題【コミュニケーション能力の不足】



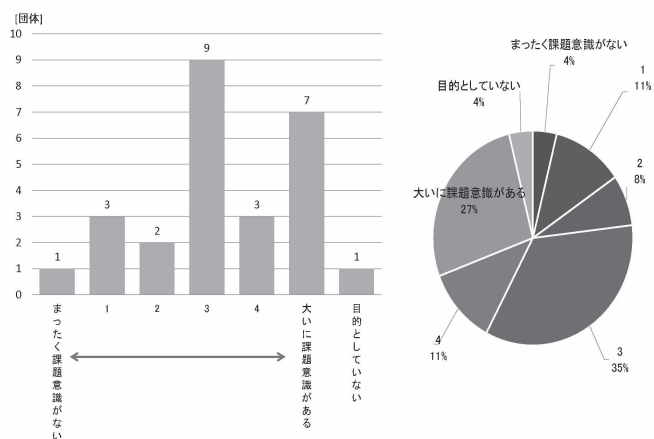
Q14(3)①.事業の課題【事業の認知不足や広報宣伝の不足】



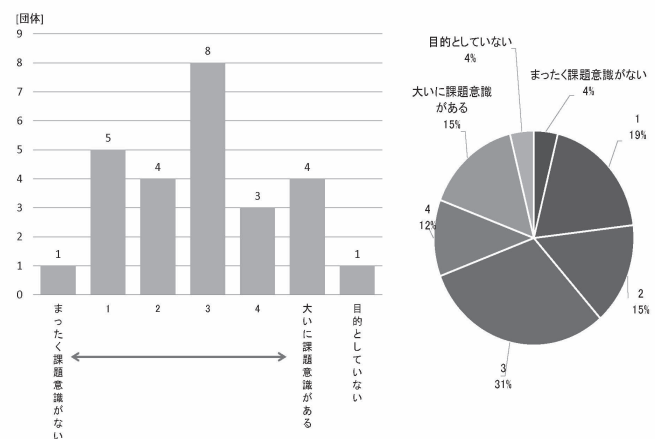
Q14(3)②.事業の課題【事業価値を理解してもらう広報手法の確立】



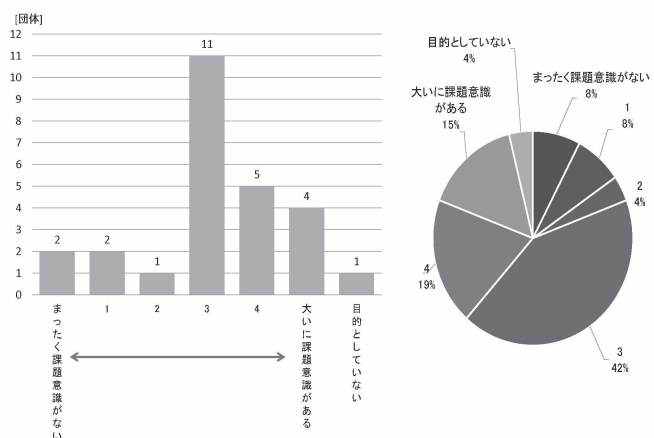
Q14(4)①.事業の課題【芸術分野の専門担当者の不足】



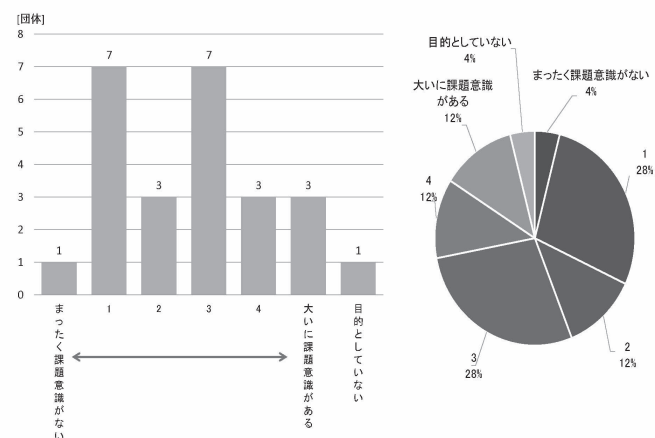
Q14(4)②.事業の課題【経理、税務担当者の不足】



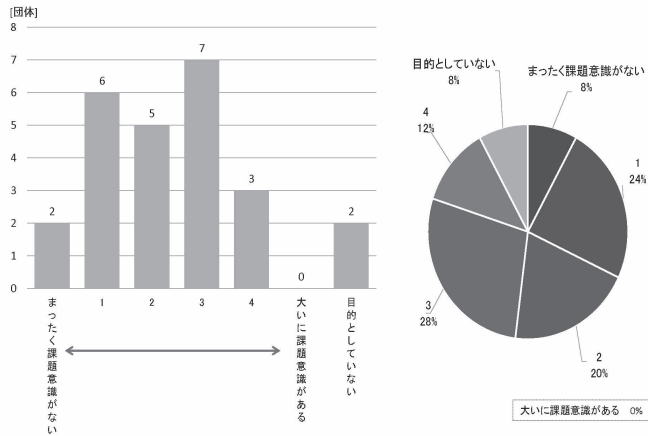
Q14(4)③.事業の課題【アーティストの補助作業人材の不足】



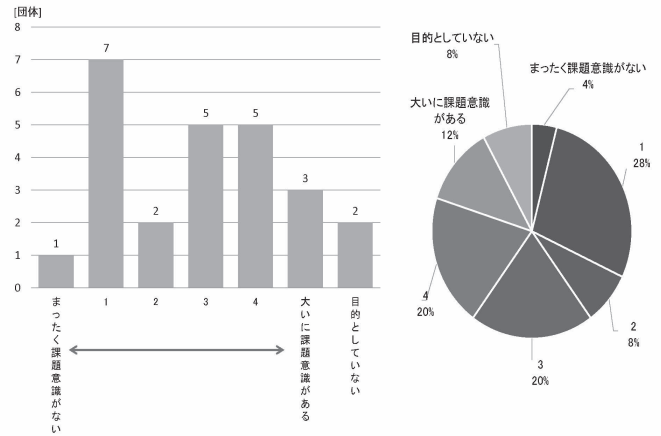
Q14(5)①.事業の課題【創作活動の支援が不十分】



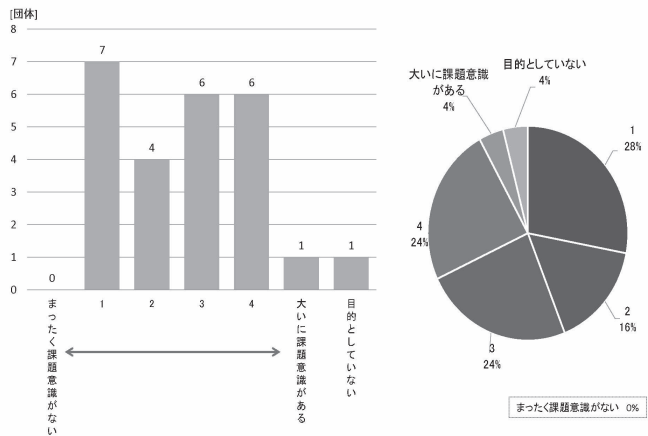
Q14(5)②.事業の課題【受入手続きのシステム化の不足】



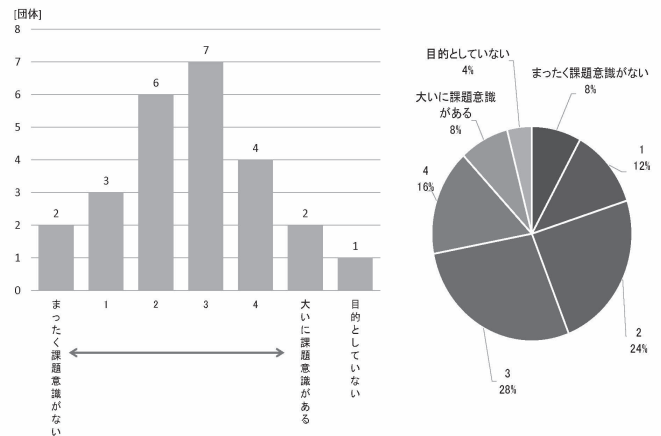
Q14(5)③.事業の課題【海外作家への手続き・対応等の不足】



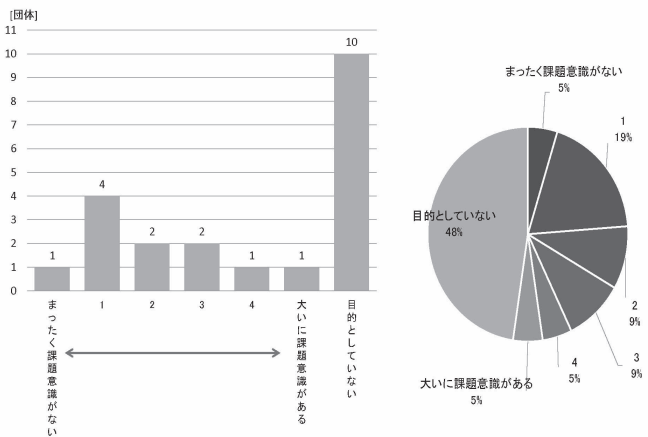
Q14(5)④.事業の課題【日常生活の支援が不十分】



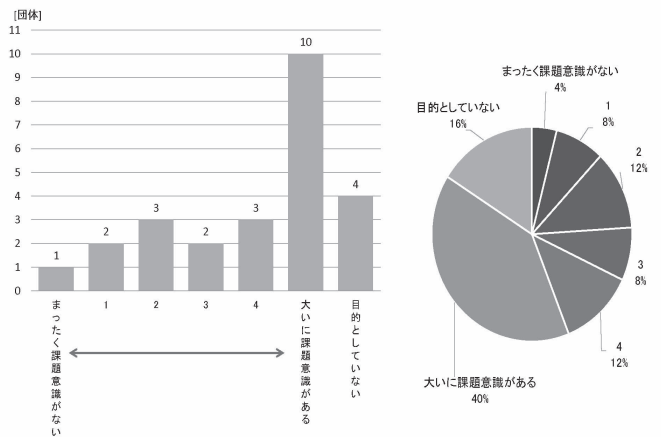
Q14(5)⑤.事業の課題【アーティストの成果提示の不足】



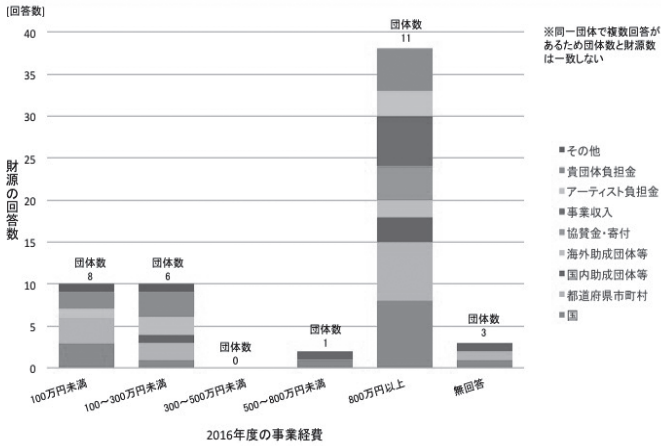
Q14(5)⑥.事業の課題【経費納入方法でのカードの取扱い】



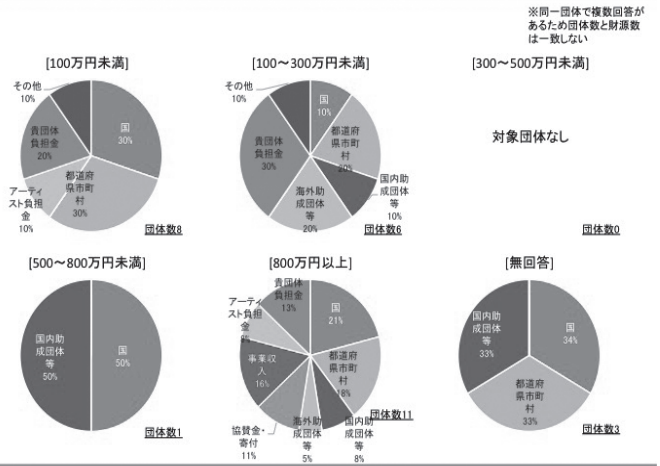
Q14(6).事業の課題【事業の財源不足や不安定な財政基盤】



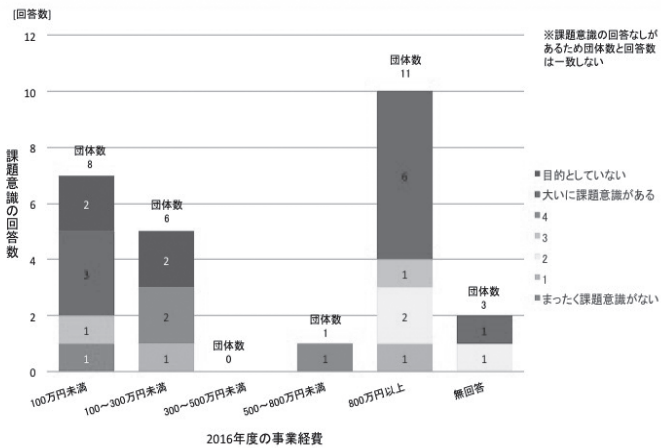
(1)経費と財源 ①2016年度事業経費と財源



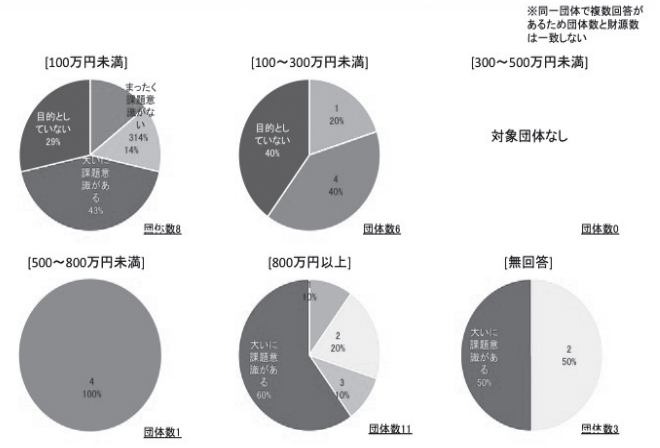
(1)経費と財源 ②2016年度事業経費の財源(割合表示)



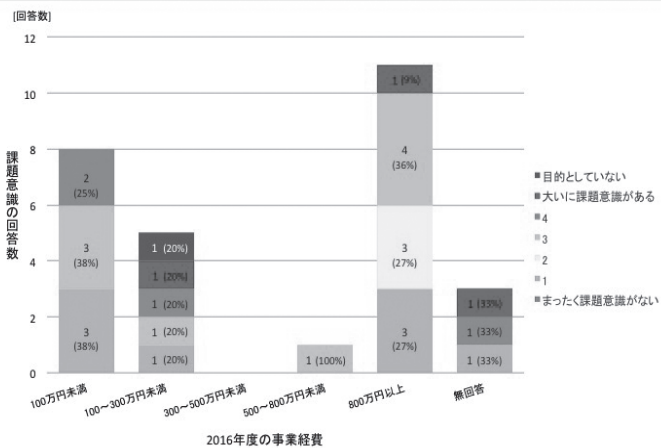
(1)経費と財源 ③2016年度事業経費と財源不足の課題意識



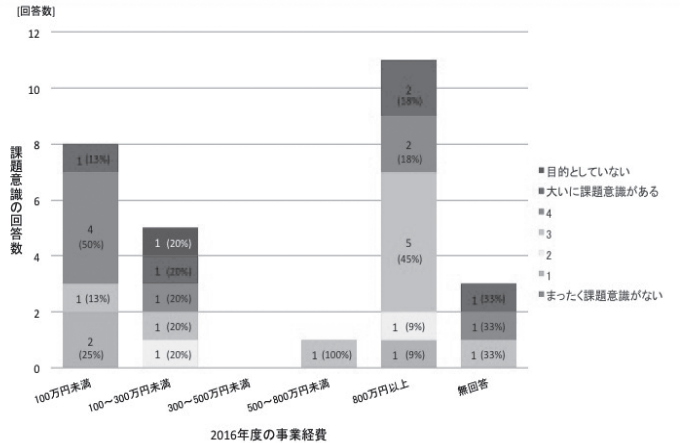
(1)経費と財源 ③2016年度事業経費と財源不足の課題意識(割合表示)



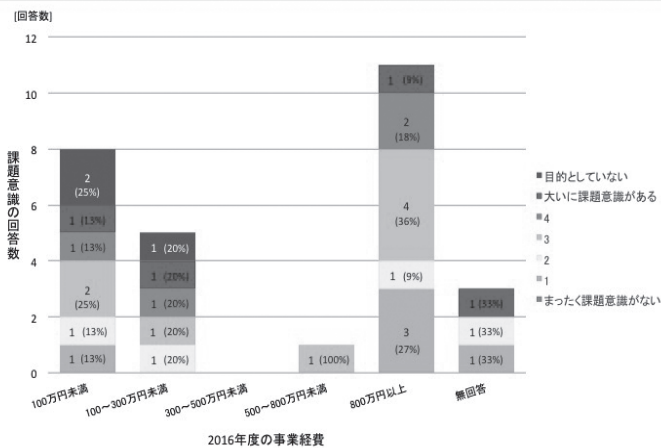
(2)人材(能力) ①専門知識の不足に対する課題意識



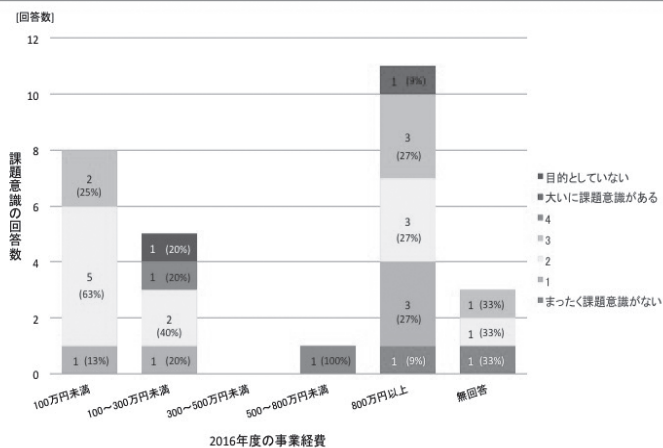
(2)人材(能力) ②コーディネート人材の不足に対する課題意識



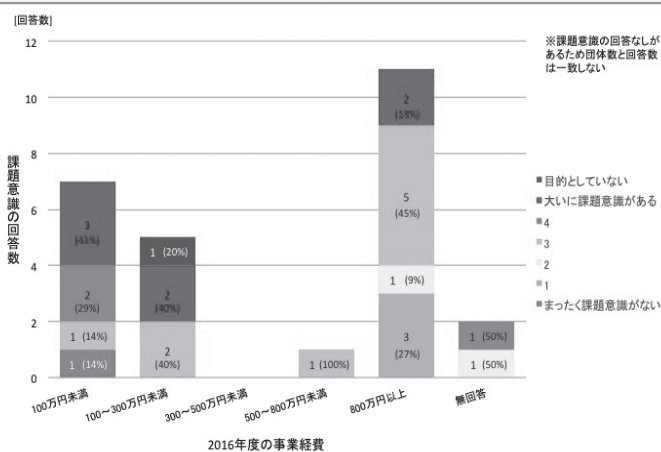
(2)人材(能力) ③外国語能力の不足に対する課題意識



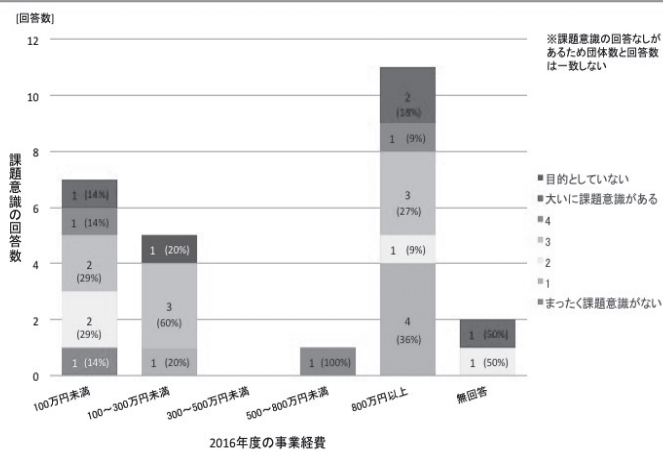
(2)人材(能力) ④コミュニケーション能力の不足に対する課題意識



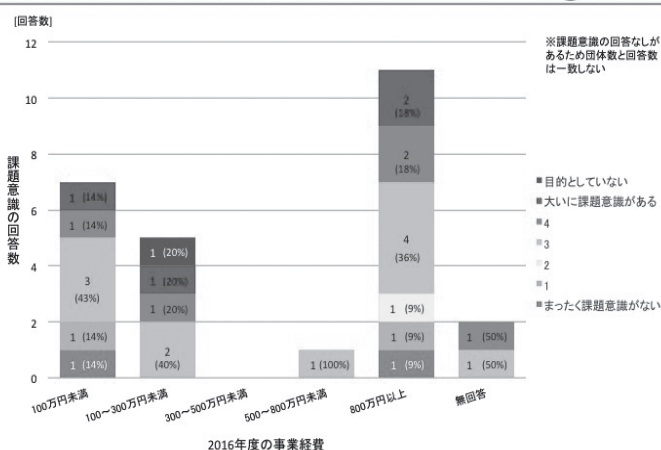
(3)人材(専門) ①芸術分野専門担当者の不足に対する課題意識



(3)人材(専門) ②経理財務専門担当者の不足に対する課題意識



(3)人材(専門) ③補助作業人材の不足に対する課題意識



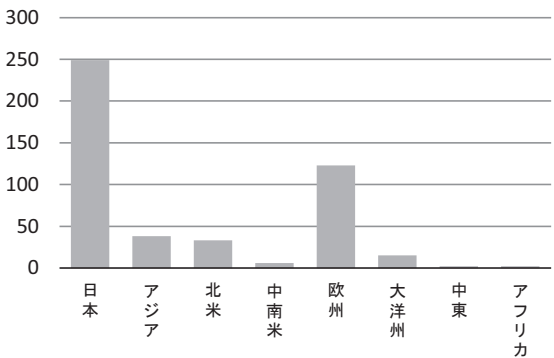
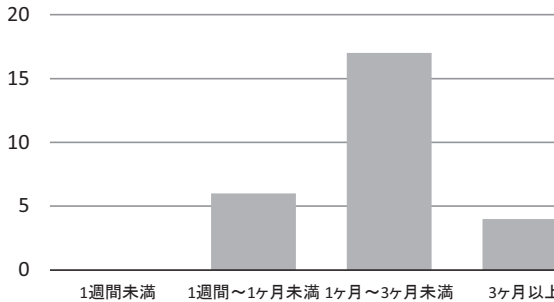
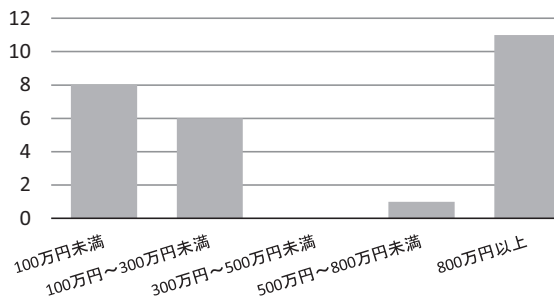
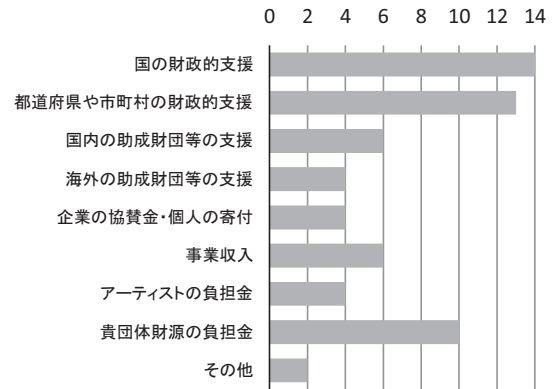
『AIR事業の運営に関するアンケート』 結果							
実施期間	2017年7月1日(土)～7月25日(火)	送付数	68	回答数	28	回答率	41%

41%

質問		回答結果				
No.	内容	選択肢	回答数	%	グラフ	
1	団体名	別紙1 [Q1.団体名/Q2.法人格/Q3.認定・設立年月/Q4.AIR事業の目的] を参照				
2	法人格	特定非営利活動法人	3	10.7%		
		認定特定非営利活動法人	0	0.0%		
		一般財団法人	0	0.0%		
		一般社団法人	2	7.1%		
		公益財団法人	8	28.6%		
		公益社団法人	0	0.0%		
		地方自治体直営	4	14.3%		
		任意団体	3	10.7%		
		その他	8	28.6%		
		その他	地方自治体			3
			公立大学法人			1
			株式会社			1
			有限会社			1
ドイツ公的文化機関			1			
青雲館			1			
3	設立年月	1900～1950年	1	4.0%		
		1951～1960年	0	0.0%		
		1961～1970年	1	4.0%		
		1971～1980年	0	0.0%		
		1981～1990年	4	16.0%		
		1991～2000年	4	16.0%		
		2001～2010年	9	36.0%		
		2011～2017年	6	24.0%		
		事業目的	別紙1 [Q1.団体名/Q2.法人格/Q3.認定・設立年月/Q4.AIR事業の目的] を参照			

質問		回答結果				
No.	内容	選択肢	回答数	%	グラフ	
5	事業内容	創作環境の提供	27	17.8%		
		滞在施設の運営	17	11.2%		
		制作プロセスの公開	21	13.8%		
		展覧会、公演	25	16.4%		
		ワークショップ	21	13.8%		
		シンポジウム、セミナー、レクチャー	17	11.2%		
		調査研究、親睦会	14	9.2%		
		その他	10	6.6%		
		その他	国内外のアーティスト・イン・レジデンス団体のネットワーク構築			1
			水性木版画の技術指導、日本の伝統的技術・文化の指導			1
			和歌山市より制作現場へマイクロバスで案内するアートツアー、展示会、アーティストトークなど			1
			アーティストの交換、C.A.Pから海外のアーティストグループやコミュニティーにレジデンスに行く			1
			学校との交流、地元作家との交流			1
			Youtube、Live Video、Facebook、Twitter、その他SNS			1
			国際AIR Network活動「Microresidence Network」主宰			1
滞在中の地域住民との交流やワークショップ等の開催は作家と相談のうえ実施する。それに伴う広報活動				1		
滞在・作品制作場所の紹介、作品発表に係る広報活動				1		
記録集の発行				1		
6	対象分野	音楽	14	11.2%		
		演劇	11	8.8%		
		舞踏・ダンス	14	11.2%		
		パフォーマンス	16	12.8%		
		美術	21	16.8%		
		映像・映画	14	11.2%		
		伝統芸能	8	6.4%		
		生活文化	6	4.8%		
		工芸	13	10.4%		
		その他	8	6.4%		
		その他	建築			3
			メディア・アート			1
			文化芸術論・批評			1
			小説家			1
			詩人			1
アートプロジェクト				1		
写真				1		
デザイン				1		
制限なし				1		
八戸の地域資源(観光資源・文化・もの・食・人など)を素材に、まちと人をつなぐ創作活動を実施することとしているため、分野は特定していない。				1		
現代芸術分野			1			

【2016年度の活動に関して】

質問		回答結果				
No.	内容	選択肢	回答数	%	グラフ	
7	アーティストの 出身地域	日本	249	53.2%		
		アジア	38	8.1%		
		北米	33	7.1%		
		中南米	6	1.3%		
		欧州	123	26.3%		
		大洋州	15	3.2%		
		中東	2	0.4%		
		アフリカ	2	0.4%		
8	アーティストの 平均滞在期間	1週間未満	0	0.0%		
		1週間～1ヶ月未満	6	22.2%		
		1ヶ月～3ヶ月未満	17	63.0%		
		3ヶ月以上	4	14.8%		
9	事業経費	100万円未満	8	30.8%		
		100万円～300万円未満	6	23.1%		
		300万円～500万円未満	0	0.0%		
		500万円～800万円未満	1	3.8%		
		800万円以上	11	42.3%		
10	財源	国の財政的支援	14	22.2%		
		都道府県や市町村の財政的支援	13	20.6%		
		国内の助成財団等の支援	6	9.5%		
		海外の助成財団等の支援	4	6.3%		
		企業の協賛金・個人の寄付	4	6.3%		
		事業収入	6	9.5%		
		アーティストの負担金	4	6.3%		
		貴団体財源の負担金	10	15.9%		
		その他	2	3.2%		
		その他	個人・法人からの寄付			1
		その他	指定管理料			1
		その他				

【事業の成果に関して】

質問		回答結果			
No.	内容	選択肢	回答数	%	グラフ
11 ①	アーティスト自身の作品の創作	まったく成果がない	0	0.0%	
		1	0	0.0%	
		2	0	0.0%	
		3	1	3.7%	
		4	9	33.3%	
		大いに成果がある	16	59.3%	
		目的としていない	1	3.7%	
11 ②	アーティスト自身の作品の発表	まったく成果がない	0	0.0%	
		1	0	0.0%	
		2	0	0.0%	
		3	3	11.1%	
		4	12	44.4%	
		大いに成果がある	10	37.0%	
		目的としていない	2	7.4%	
11 ③	アーティスト自身の作品の調査や研究	まったく成果がない	0	0.0%	
		1	0	0.0%	
		2	0	0.0%	
		3	4	16.0%	
		4	7	28.0%	
		大いに成果がある	9	36.0%	
		目的としていない	5	20.0%	
11 ④	事業の成果 アーティスト自身の 休暇や保養	まったく成果がない	0	0.0%	
		1	0	0.0%	
		2	1	3.8%	
		3	5	19.2%	
		4	5	19.2%	
		大いに成果がある	4	15.4%	
		目的としていない	11	42.3%	
11 ⑤	アーティストの相互交流	まったく成果がない	0	0.0%	
		1	0	0.0%	
		2	1	3.7%	
		3	1	3.7%	
		4	7	25.9%	
		大いに成果がある	15	55.6%	
		目的としていない	3	11.1%	

質問		回答結果			
No.	内容	選択肢	回答数	%	グラフ
11 ⑥	地域住民との相互交流	まったく成果がない	0	0.0%	
		1 ↑	0	0.0%	
		2	2	7.4%	
		3	8	29.6%	
		4 ↓	7	25.9%	
		大いに成果がある	9	33.3%	
		目的としていない	1	3.7%	
11 ⑦	文化・芸術の振興や普及	まったく成果がない	0	0.0%	
		1 ↑	0	0.0%	
		2	0	0.0%	
		3	8	29.6%	
		4 ↓	13	48.1%	
		大いに成果がある	5	18.5%	
		目的としていない	1	3.7%	
11 ⑧	まちづくり、地域活性化	まったく成果がない	0	0.0%	
		1 ↑	1	3.8%	
		2	1	3.8%	
		3	10	38.5%	
		4 ↓	7	26.9%	
		大いに成果がある	4	15.4%	
		目的としていない	3	11.5%	
11 ⑨	国際交流、多文化共生	まったく成果がない	0	0.0%	
		1 ↑	0	0.0%	
		2	3	11.5%	
		3	3	11.5%	
		4 ↓	7	26.9%	
		大いに成果がある	10	38.5%	
		目的としていない	3	11.5%	
11 ⑩	その他事業の成果				

質問		回答結果			
No.	内容	選択肢	回答数	%	グラフ
12	最も効果のある成果	アーティスト自身の作品の創作	9	33.3%	
		アーティスト自身の作品の発表	1	3.7%	
		アーティスト自身の作品の調査や研究	1	3.7%	
		アーティスト自身の休暇や保養	0	0.0%	
		アーティストの相互交流	5	18.5%	
		地域住民との相互交流	4	14.8%	
		文化・芸術の振興や普及	3	11.1%	
		まちづくり、地域活性化	2	7.4%	
		国際交流、多文化共生	2	7.4%	
		該当する項目はない	0	0.0%	
13	成果・効果があったエピソード	別紙2〔Q13.特に成果があったエピソード/想定外の効果があったエピソード〕を参照			

【事業の課題に関して】

質問		回答結果			
No.	内容	選択肢	回答数	%	グラフ
14 (1) ①	[施設機材面] 施設の広さや室数の不足	まったく課題意識がない	1	3.6%	
		1	4	14.3%	
		2	2	7.1%	
		3	10	35.7%	
		4	6	21.4%	
		大いに課題意識がある	4	14.3%	
		目的としていない	1	3.6%	
14 (1) ②	[施設機材面] 必要な設備や備品の不足	まったく課題意識がない	0	0.0%	
		1	3	10.7%	
		2	4	14.3%	
		3	11	39.3%	
		4	3	10.7%	
		大いに課題意識がある	6	21.4%	
		目的としていない	1	3.6%	
14 (2) ①	[人材面] 専門知識の不足	まったく課題意識がない	0	0.0%	
		1	8	28.6%	
		2	3	10.7%	
		3	9	32.1%	
		4	4	14.3%	
		大いに課題意識がある	3	10.7%	
		目的としていない	1	3.6%	

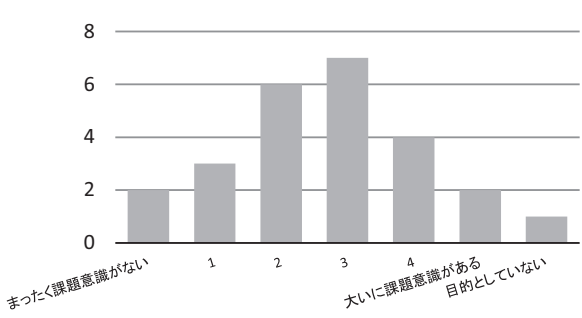
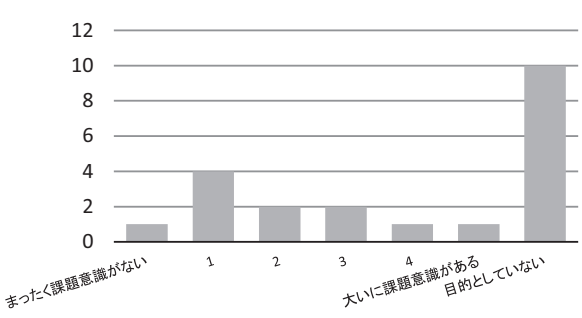
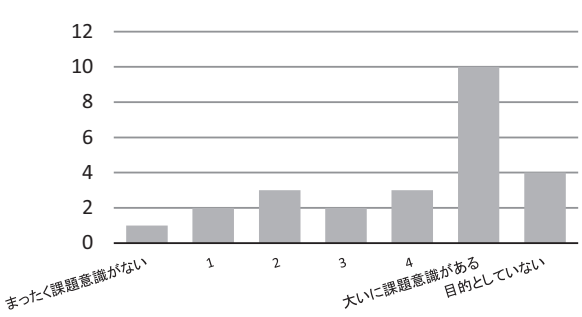
14 (2) ②	[人材面] コーディネーター人 材の不足	まったく課題意識がない	0	0.0%	
		1 ↑	3	10.7%	
		2	2	7.1%	
		3	9	32.1%	
		4 ↓	8	28.6%	
		大いに課題意識がある	5	17.9%	
		目的としていない	1	3.6%	
14 (2) ③	[人材面] 外国語能力の不 足	まったく課題意識がない	0	0.0%	
		1 ↑	5	17.9%	
		2	4	14.3%	
		3	8	28.6%	
		4 ↓	4	14.3%	
		大いに課題意識がある	4	14.3%	
		目的としていない	3	10.7%	

質問		回答結果			
No.	内容	選択肢	回答数	%	グラフ
14 (2) ④	[人材面] コミュニケーション 能力の不足	まったく課題意識がない	2	7.1%	
		1 ↑	5	17.9%	
		2	11	39.3%	
		3	6	21.4%	
		4 ↓	2	7.1%	
		大いに課題意識がある	1	3.6%	
		目的としていない	1	3.6%	
14 (3) ①	[広報面] 事業の認知不足 や広報宣伝の不 足	まったく課題意識がない	1	3.6%	
		1 ↑	0	0.0%	
		2	3	10.7%	
		3	9	32.1%	
		4 ↓	9	32.1%	
		大いに課題意識がある	4	14.3%	
		目的としていない	2	7.1%	
14 (3) ②	[広報面] 事業価値を理解 してもらおう広報 手法の確立	まったく課題意識がない	1	3.6%	
		1 ↑	0	0.0%	
		2	2	7.1%	
		3	7	25.0%	
		4 ↓	10	35.7%	
		大いに課題意識がある	7	25.0%	
		目的としていない	1	3.6%	

14 (4) ①	[組織] 芸術分野の専門 担当者の不足	まったく課題意識がない	1	3.8%	
		1	3	11.5%	
		2	2	7.7%	
		3	9	34.6%	
		4	3	11.5%	
		大いに課題意識がある	7	26.9%	
		目的としていない	1	3.8%	
14 (4) ②	[組織] 経理、税務担当 者の不足	まったく課題意識がない	1	3.8%	
		1	5	19.2%	
		2	4	15.4%	
		3	8	30.8%	
		4	3	11.5%	
		大いに課題意識がある	4	15.4%	
		目的としていない	1	3.8%	

質問		回答結果			
No.	内容	選択肢	回答数	%	グラフ
14 (4) ③	[組織] アーティストの補 助作業人材の不 足	まったく課題意識がない	2	7.7%	
		1	2	7.7%	
		2	1	3.8%	
		3	11	42.3%	
		4	5	19.2%	
		大いに課題意識がある	4	15.4%	
		目的としていない	1	3.8%	
14 (5) ①	[受入態勢] 創作活動の支援 が不十分	まったく課題意識がない	1	4.0%	
		1	7	28.0%	
		2	3	12.0%	
		3	7	28.0%	
		4	3	12.0%	
		大いに課題意識がある	3	12.0%	
		目的としていない	1	4.0%	
14 (5) ②	[受入態勢] 受入手続きのシ ステム化の不足	まったく課題意識がない	2	8.0%	
		1	6	24.0%	
		2	5	20.0%	
		3	7	28.0%	
		4	3	12.0%	
		大いに課題意識がある	0	0.0%	
		目的としていない	2	8.0%	

14 (5) ③	[受入態勢] 海外作家への手 続き・対応等の不 足	まったく課題意識がない	1	4.0%	
		1 ↑	7	28.0%	
		2	2	8.0%	
		3	5	20.0%	
		4 ↓	5	20.0%	
		大いに課題意識がある	3	12.0%	
		目的としていない	2	8.0%	
14 (5) ④	[受入態勢] 日常生活の支援 が不十分	まったく課題意識がない	0	0.0%	
		1 ↑	7	28.0%	
		2	4	16.0%	
		3	6	24.0%	
		4 ↓	6	24.0%	
		大いに課題意識がある	1	4.0%	
		目的としていない	1	4.0%	

質問		回答結果			
No.	内容	選択肢	回答数	%	グラフ
14 (5) ⑤	[受入態勢] アーティストの成 果提示の不足	まったく課題意識がない	2	8.0%	
		1 ↑	3	12.0%	
		2	6	24.0%	
		3	7	28.0%	
		4 ↓	4	16.0%	
		大いに課題意識がある	2	8.0%	
		目的としていない	1	4.0%	
14 (5) ⑥	[受入態勢] 経費納入方法で のカードの取扱い	まったく課題意識がない	1	4.8%	
		1 ↑	4	19.0%	
		2	2	9.5%	
		3	2	9.5%	
		4 ↓	1	4.8%	
		大いに課題意識がある	1	4.8%	
		目的としていない	10	47.6%	
14 (6)	[財政面] 事業の財源不足 や不安定な財政 基盤	まったく課題意識がない	1	4.0%	
		1 ↑	2	8.0%	
		2	3	12.0%	
		3	2	8.0%	
		4 ↓	3	12.0%	
		大いに課題意識がある	10	40.0%	
		目的としていない	4	16.0%	
15	その他の課題	別紙3 [Q15.その他の課題] を参照			

AIR 事業の目的

No	団体名 ※法人格略	組織 (法人格/その他)	法人認証年月	AIR事業の目的
1	京都芸術センター (公益財団法人 京都市芸術文化協会)	公益財団法人	1981年9月	芸術家や芸術分野の制作者、研究者等が、一定期間京都に滞在しながら創作活動や交流を行うプログラムである。異なる文化に触れることで新しい芸術表現を生み出そうとする新進、または若手のアーティストや芸術分野の研究者等の滞在創作活動を支援することを目的とする。
2	産業人文学研究所/国際木版画ラボ	一般社団法人	2006年4月	水性木版画の海外普及、ならびに道具、材料の活性化
3	大原美術館	公益財団法人	1935年3月	若手作家支援、児島虎次郎(当館の礎となる作品収集にあたった画家)のアトリエ活用、倉庫からの発信
4	和歌山芸術文化支援協会	特定非営利活動法人	2001年2月	地域の文化資源をアートを通して地元の人たちや訪れる人たちに体験してほしいと願って企画している。アーティストの「ちから」と「作品」によって足元に広がる大地や森を抜ける風に、普段と違う見え方、感じ方を気付いてほしいと子どもたちや住民、訪れる人たちとの交流事業を目的としている。
5	芸術と計画会議(C.A.P)	特定非営利活動法人	2002年4月	神戸のアーティストコミュニティの充実
6	瀬戸市文化振興財団	公益財団法人	2005年10月	世界で活躍する作家が長い陶芸の歴史を持ち、ガラスの原材料の産地である瀬戸市において、市民や瀬戸市および周辺地域で活動する作家等の交流を深めながら制作を行うことで、「陶芸・ガラス芸術の新たな展開が生まれること」、そして「芸術的感性と国際感覚豊かな地域づくり」を目指す。
7	長野市	地方自治体		①地域の住民への芸術、異文化に触れる機会の提供と、地域の魅力や資源の再認識等による地域の活性化を目的としている。 ②アーティストにとっては、新たな土地や出会いから経験やインスピレーションを得ることにより、創作活動が活発化することも狙いとしている。
8	高知県文化財団	公益財団法人	1990年3月	①海外アーティストが地域に滞在し、作品創作する機会の提供 ②地域のアーティストが海外アーティストと共同制作する機会の提供
9	現代美術センター・CCA北九州	任意団体	1997年5月	①現代美術の国内外の若手アーティストを対象とした養成コース ②地域の芸術文化活動が国際的な広がりを持ち、本市における芸術文化の潜在能力を大きく高めるとともに、学術研究分野の振興にも寄与するため。
10	SEIUNKAN Art In Residence(SAIR)	その他 / 青雲館	1961年6月	AIRBNBのインバウンド促進の延長線上で、これまでの地産地消、食育、伝統文化、異文化交流、農業体験、景観保全、耕作放棄地再生、古民家再生、他を包括的な地域活性化運動につなげていく、そういう中でのAIRの位置付け
11	山口きらめき財団 秋吉台国際芸術村	公益財団法人	2012年4月	①世界に開かれた「芸術文化の創造と発信」の場として、音楽、美術、ダンス、演劇など幅広い芸術文化活動に対応できる滞在型芸術文化施設であり、国内外から芸術家が集い、創造的な活動を繰り広げることで、地域から世界に向けて情報発信を行っている。 ②「秋吉台国際芸術村アーティスト・イン・レジデンス事業」は、宿泊施設を有する芸術村の施設の特色を活用し、海外の若手、あるいは中堅芸術家の短期(30日程度)及び長期(60日程度)滞在による創作活動を支援するとともに、県民が気軽に質の高い芸術文化に接する機会を提供し、地域文化の振興を図ることを目的としている。 ③地域住民との協働を条件とし、県民がアートや国際交流をより身近なものとして経験する機会を提供する。
12	越後妻有里山協働機構	特定非営利活動法人	2008年7月	①大地の芸術祭をきっかけに生まれた施設を活かし、地域づくりにもつながる活動を行う。 ②大地の芸術祭が展開する地で、滞在施設や、地域と交流のできる環境を提供することで、アーティストの創作に役立てていただく。
13	Awaji Art Circus実行委員会	任意団体	2016年9月	淡路島の魅力を、芸術を通して世界にとどめるため。
14	山口市文化振興財団 山口情報芸術センター[YCAM]	公益財団法人	1996年3月	当財団が運営する山口情報芸術センター[YCAM]は、メディアテクノロジーと身体をめぐる新しい芸術表現を追求し、オリジナルの作品を制作・発表することを重視している。AIR事業においては、様々な専門分野のアーティストを招聘し、YCAMスタッフと共同制作を行うことで、異分野が交錯する新しいアート表現の可能性を検討しながら、YCAMの機能・環境を生かしたオリジナル作品を地方から世界へ発信することを目的としている。
15	八戸まちづくり文化スポーツ観光部 八戸ポータルミュージアム「はっち」	地方自治体直営	2011年2月	市民がアートを通して八戸の魅力を発見し、新たな出会いと関係を生み出すことで、より魅力あるまちをつくることを目的とする。
16	ゲーテ・インスティテュート・ヴィルツブルグ	ドイツ公的文化機関	1983年11月	①アーティストたちが京都滞在中によりインスピレーションを得て、芸術性を新たに方向づけるため。 ②来日して日本の文化シーンと直接交流を図る中、新たなプロジェクトを展開し、日本の文化機関や芸術家との持続可能な関係を築き深めるため。
17	有限会社遊工房 遊工房アートスペース	有限会社	2005年9月	遊工房アートスペースは、多様な創作活動に応える実践の場となることでアーティストを支え、アートの社会的な役割とその重要性を提示することを目指している。
18	株式会社同時代 同時代ギャラリー	株式会社	2006年5月	両国アーティストの交流と制作発表の支援(スイス・ジュネーブ-日本・京都)
19	浜松創造都市協議会 (鴨江アートセンター)	一般社団法人	2011年3月	①制作場所を提供し、アーティストを支援育成する。 ②レジデンス期間中の制作過程や成果発表を通じ、市民との交流の機会を設ける。 ③地域の文化力を牽引するアーティストの自立のためのインキュベーターとなる。

20	豊岡市立城崎国際アートセンター	地方自治体直営	2014年4月	①豊岡市城崎町の新たな魅力として、独創的で将来性のあるアーティストの滞在制作を支援し、国内外の劇場や芸術祭とのパートナーシップのもと、日本中・世界中に発信する共同制作の拠点をつくる。 ②ワークショップや試演会、アーティスト・トークなど、町の人々や観光客との交流の中で、様々な芸術体験を共有する活動をコーディネートする。城崎で出会った人々が、アートを通じてこれまでと少し違った世界の見方を発見できる環境づくりを目指す。
21	竹田市	地方自治体		作家の感性で捉えた竹田の風土を、作品を通じて発信する。新たな価値の創造、地域の魅力の再発見を図り、芸術・文化振興、移住、交流促進を目指す。
22	竹田アートカルチャー実行委員会	任意団体	2011年4月	1外部招聘レジデンス・アーティストと竹田市在住の作家が、作品制作等を通じて交流を図ることで、市内作家のレベルアップを図る。2外部招聘レジデンス・アーティストが、作品制作等を通じ、竹田市のことを知ることで、レジデンス・アーティストを通じて竹田市について知人・友人が増える。
23	益子陶芸美術館/陶芸メッセ・益子	地方自治体直営	1993年6月	益子町と国内外のアーティストの交流促進や、益子の陶芸(工芸)文化の共有を目的としている。今からおよそ100年前、陶芸家・濱田庄司(1894-1978)がバーナード・リーチ(1887-1979)と共に、英国南西部の港町セント・アイヴスへ渡り窯を築いた交流の歴史を背景に、英国を中心に招聘・公募を行っている。現在は、英国以外にも対象を広げている。
24	金沢芸術創造財団 (金沢湯涌創作の森)	公益財団法人	2003年10月	当施設を国内外に広報・周知するため。
25	高松市	地方自治体		市内にある活用されていない資源(空き家、廃校、商店街の空き店舗等)を活用し、アーティストが一定期間滞在し地域と交流しながら作品制作を行うことで、地域の協働を生み、地域に賑わいをもたらすとともに、アートの普及や若手アーティスト等の育成を行う。
26	滋賀県陶芸の森	公益財団法人		①AIRの目的で最重要されることは、アーティストが普段とは違う文化や環境の中で滞在生活しながら制作に取り込める場所、人材、機会などを提供することにあると思う。制作活動とともに、滞在中に生まれる他のアーティストとの相互関係も重要視されると思うので、それを達成するために生活環境やスタジオ施設等の継続的な改善も重要な目的のひとつだと思う。 ②このレジデンススタジオで様々なアーティストや異なったバックグラウンドを持つ人達が集まり、新しい設備や音楽の土を使い制作し共に生活することにより互いを刺激し、活動できる場を作る。
27	森公立大学国際芸術センター青森	公立大学法人		青森公立大学における学術的研究活動を推進するとともに、学生および地域住民の学術文化に関する素養の涵養を図り、もって国際的教養人の育成および地域社会の振興に寄与することを目的とする。
28	アーカスプロジェクト実行委員会	地方自治体直営		若手芸術家支援(主)、交流を通じての地域活性化(副)

Q13. 特に成果があったエピソード

想定外の効果があったエピソード

- レジデンス・アーティストが日本のアーティストと出会い、今後のコラボレーションにつながる例となった。
- これまでの滞在アーティストに対し行なったプログラム参加後のアンケートから、博士号取得者 6 名、大学等の教職 29 名、スタジオ開設 39 名、AIR 開設 6 名、研究職 22 名、書籍出版 7 名という成果が出た。
- アーティストによる効果的かつ専門的なレベルのワークショップの開催。
- 近隣の方々の展覧会への来場、近隣の学校等における講座の機会、学生が授業の一環としてスタジオでのワークショップを受講。
- 作家同士の横の繋がりが生まれ、その後の交流につながった。
- 帰国後のアーティストによる PR が地域の知名度向上やプログラムの認知につながり、レジデンスを行いたいというアーティストが増えた。
- 滞在地で手に入れた素材を作品制作に取り入れるようになり、アーティストの創作活動の幅が広がった。
- 地域の祭りで神楽や獅子舞に見入るアーティストの姿を見て、地域住民が、自分たちの地域の文化の魅力を再発見する効果があった。
- アーティストが寝食を共有することは、情報交換の場として、個々のつながりの場として、文化交流として、創作活動にも得られるものが多い。
- アーティストによる地域の工場や美術館見学は、レジデンスプログラムを地域住民に知ってもらう良い機会である。
- レジデンスをきっかけに新しい試みを行い、レジデンス終了後も制作・調査を続けて作品を発展させ、他所での発表を行うアーティストが多い。
- レジデンス期間中にアーティストが相互に交流を深め、ユニットとして他所のレジデンスに応募すること、母国での展覧会に他のアーティストを招へいすること、自分が主宰するレジデンスに他のアーティストを招へいすること等、アーティスト間の交流が頻繁に起こっている。
- 滞在中に成果を求めない(完成作品を求めない)特徴から、新しい表現、制作方法やプロジェクトに取り組み、挑戦する作家が多い。
- 日系ブラジル人のコミュニティ(学生たち)との新しい交流が生まれ、アーティストを通じて学生の自己表現を見ることができたと保護者や先生方から感謝の言葉を頂戴した。その活動成果はブラジルのジャパンハウス(サンパウロ)の開館に合わせて、地元のレジデンスである FAAP にて発表された。
- レジデンスに関わった日本人ダンサーが英国に招へいされ、リサーチや上演に携わることができ、レジデンス後の相互交流となった。

- 当館委嘱とクレジットされることで、地域の地名を発信できた。
- アーティスト同士、地域住民との個人レベルの交流が続いている。
- 地域がアーティストの作品制作やリサーチに協力をし、地元企業とのコラボレーション作品も生まれた。
- アーティストが滞在中に他の利用者と出会うことにより、パフォーマンスを共に行う等、協働する場面があった。
- 滞在するアーティスト同士の深い友好関係ができ、制作においても相互にアドバイスをし合い、コラボレーション作品を制作する等の関係が生まれた。また、帰国後も連絡を取り合い、情報交換を行うなど、人的なネットワークの構築も進んでいる。
- 参加者が事業に積極的に参画をし、参加者間で実行委員会を立ち上げ、行動に移す動きが出た。
- 市役所内の他部署から連携実施の依頼を受け、アウトリーチを行う等の成果が出ている。
- 近隣の大学、文化施設でのイベントにアーティストが招待され、日本人アーティストとのコラボレーションをし、帰国後、本国で日本人アーティストとのイベントを開催した。
- 招へいアーティストの滞在制作作品が大使館に永久保存となった。
- 年齢やジャンルを問わずアーティストを採択しているため、各自の人生経験やアーティスト活動の経験からのアドバイスをし合い、良い刺激を双方で受けることができ、自然発生的な学びの場となった。
- 採択されたアーティストのほとんどが、アートと地域、社会の関係について思考していないことがわかった。
- アートや工芸を通じて、若い世代の移住定住、文化振興を目指す当市の政策や姿勢を広く周知できた。
- レジデンス・アーティストと地域在住作家がコラボレーションをした作品が建築の賞を受賞した。
- 作家を講師として開催する参加型ワークショップは人気。作家側が参加者の作品にインスピレーションを受けることもある。
- 作家にとって新素材に挑戦したからこそ生まれた表現が、母国に帰ってもからも作品制作に影響し、発展している。
- アーティストの滞在場所や作品制作・発表を行う施設が定まっていないため、アーティスト自身が選んだ場所で活動を行っており、様々な地域の住民とアーティストが交流できている。
- 近隣市からの招へいや、地域住民の要望により活動を継続して行うケースもあった。
- 他のアーティストと交流することにより新しいアイデアが生まれ、技術の交換をすることにより、制作の幅が大きく広がる。

Q15. その他の課題

スタッフにはノウハウが蓄積されているが、近年は多くのアーティストを受け入れるようになり、外部からコーディネーターを契約で雇うという状況になっている。しかし、なかなかフリーランスでレジデンスのコーディネーター業務をお願いできる方が少なく、人材不足を感じている。

近年アジアや南米等様々な地域からアーティストを受け入れており、国ごとのビザや税金の扱い方、契約償還等が異なり、業務が複雑化している。

AIR の現状として、事業主体、運営者、アーティストそれぞれの目的が一致しているのか調査してもよいのではないかと。地域活性化、空家対策等、様々な動機に基づいている現状の AIR の断面を明らかにする意味は大きい。

様々なレジデンスのスタイルがあり、地域ならではの実施内容、規模の大小等があるが、財源確保には難しさを感じている。

AIR への応募が多数あり、他の宿泊客とのバランスが難しい。

アーティストの分野が多岐にわたるので、専門知識を外部サポーターに依存せざるを得ないのが実態である。

海外 AIR 間との双方向のアーティスト交換プログラム展開の場合の経費負担条件（経費項目、額、負担責任等）を、事例ごとに都度調整・合意を取っている現実であるが、自国側作家支援の原則とすべく努力している。（AIR 機関としての自律的経営を目指すため）

施設の都合上、工房利用者（一般の方）が少ない時期であったため、制作する様子があまり見せられなかったのが残念であった。

初めてのレジデンスプログラムで、どこまで関わってよいのかわからず戸惑った。他の施設がどのように作家に接しているのか、またここで制作したいと思っていただける環境とは何か、アーティストによって考え方は異なるが、これからの課題だと思っている。

アーティストの活動場所が特定していないことから、活動場所を決定するまでに時間や労力を要する。

廃校や空き家・空き店舗の活用も当プログラムの目的の一つとしているが、思うように利用できないことが多い。

レジデンスアーティストの支援対応は万全の態勢を整えることに努力しているが、その分、運営スタッフへの超過労働、スタッフ不足、雇用等の待遇の低さが現場では最も危機的問題課題と考える。

人材育成を図りたいが、そのための財源を確保できないこと、スタッフが少人数のため、AIR の回数を年に一度しか実施できない経済上の課題がある。通年で AIR を実施しておられる他団体に比べ、運営年数は長く、質の保持には努めているものの継続していく財源を確保するのに苦労している。

AIR そのものの認知度がまだまだ高まらないため、広報の努力をする必要があると考えている。

数年分の運営資料等を活用し役立てたいと整備しているが、芸術文化事業としての価値付けをどのように定めていくか、評価を分析出来るような事例、研究資料にならないかを調査している。

他団体ではどのように活動を資料化、保存しているのか知りたい。

50 以上の団体が出来た今、国をあげて政府機関の AIR を世界に発信できるひとつだけの窓口があれば良いと思う。（AIR の情報を更新する先が 2、3 ヶ所あるだけで大変である）

アンケートから見えてくる課題

杉山道夫

滋賀県陶芸の森次長 (兼) 創作研修課長

はじめに

今回の研究会については、「レジデンス運営にあたっての実務的な課題の抽出とその課題に対する答え」を見出すきっかけとしたいということを目的とした。そのためのバックデータとして、研究会のモデレーターをお願いした菅野幸子氏と日沼禎子氏のお二人のご協力を得て、① AIR-J に登録している AIR 機関、②平成 28 年に、陶芸の森で企画運営、開催した国際シンポジウム「関西アーティスト・イン・レジデンス」の関係者等に、そのレジデンスの運営についてのアンケート調査をおこない、28 団体からの回答を得ることができた。(回答率は、約 40%)

お忙しいなか、アンケートにご協力いただいた方々にこの場を借りてお礼を申し上げる。

アンケートから見えてくること (詳細は、前掲のアンケートを参照のこと)

各団体の立場、規模、バックグラウンド等が千差万別であるなか、共通課題として「財源確保」、「人材とその能力」、「専門分野での人材」が共通的な課題であることが確認できた。このことから、前記の 3 項目について、その相関関係を分析したところ以下のようなことが見えてきた。

(1) 経費と財源

- ・事業経費 100 万円未満の団体では、国や都道府県市町村からの財源が回答数の 60% を占め、財源の種類も全体で 4 種類 (国 / 都道府県市町村 / 団体負担金 / アーティスト負担金) に限られる。
- ・事業経費が多くなるにつれて国内外の助成団体や協賛金・寄付など、国や都道府県市町村以外からの財源が増え特に 800 万円以上の団体では、幅広い財源があり、特に回答数の 16% で事業収入が財源となっており、他に頼らない自らの財源を持っていることがわかる。(グラフ 1 ～ 4 ・PPT ページ内)

(2) 人材とその能力

- ・コーディネート人材不足については、いずれの事業経費カテゴリーにおいても課題意識が高く、特に事業経費 100 万円未満の団体では 63% が高レベル (4 ～大いに課題意識がある) である。
- ・外国語能力の不足については、低・中・高レベルとも概ね同程度であり、大きな特徴は見られず、団体による課題意識のばらつきがあると考えられる。
- ・コミュニケーション能力の不足については、他の能力に比べて特に低～中レベル (1 ～ 3) の占める割合が多く (事業経費 100 万円未満の団体 :100%、800 万円以上の団体 :90%)、事業経費に関係なく課題意識は低い。(グラフ 5 ～ 8 ・PPT ページ内)

(3) 専門分野における人材

- ・芸術分野専門担当者の不足については、事業経費カテゴリーによる差が大きくみられた。事業経費 100 万円未満の団体では 72% が高レベル (4 ～大いに課題意識がある) であるのに対して、事業経費 800 万円以上の団体では、高レベルは 18% にとどまり、事業経費に反比例して課題意識が低くなる傾向があった。
- ・経理財務専門人材の不足については、ほとんどの事業経費カテゴリーで課題意識なし～中レベル (3) が 70% を超え、全体的に課題意識は低い。
- ・補助作業人材の不足は、いずれの事業経費カテゴリーにおいても高レベル (4 ～大いに課題意識がある) の割合が 28 ～ 40% と高い一方、課題意識なし～低レベル (1) も 20% 前後存在するなど団体による差がみられた。(グラフ 9 ～ 11 ・PPT ページ内)

(3) 調査自体の検証

この分析結果をもって、結論とするには検討不足だが、日本において「アーティスト・イン・レジデンス (AIR)」という事業が行われるようになり、まだ日が浅いということを踏まえると、現状、個々の AIR 運営については、目的、趣旨、事業内容、そこからでてくる課題も多種多様、百花繚乱的な状況であることは間違いなくと思われる。なかには、課題が見えてきていないところがあっても不思議ではないと思う。

この研究会の大きな目的は、「AIR がサステナビリティを持てるようになるにはどうすればよいか」ということであるため、今後とも関係者と課題を抽出し、解決策の提示を試みたい。また、アンケートでは問いかけていないが、評価基準の作成も必要だろう。これにより、AIR が日本の文化政策の文脈に位置づけられ、定着することへの一助としたいと考える。

今後の展望、課題解決にむけて

滋賀県立陶芸の森

松波 義実

AIR 事業を実施しているいくつかの施設と交流を持ち、研究会を行うことが出来たのは非常に有意義であり、特に、陶芸を専門としている施設の話を聞けたことが良かった。それぞれに設立の目的、産地による特性の違いがあり一概には言えないが、同じような悩み、問題点を抱え、奮闘していることを知った。他の施設の事例を聞くと、こちらの弱い部分も見え、改めて課題を考える契機にもなった。また、共通する課題に対しては、施設間で共有し、問題解決が出来るように今後も良い関係を保っていききたい。

各回の討議に明確な結論が出るわけではなかったが、それぞれの立場、様々な視点からの意見は参考になった。討議を通して、作家が満足して制作することができ、他の作家や地域との交流を促進するようなサポートが出来たらという思いを再認識できた。今後の研究会を通して、AIR の本質は何かということを確認し、日々の業務に活かしていければと思う。

益子陶芸美術館／陶芸メッセ・益子

月村 真由美

今後の展望、課題解決に向けて — 1 年間 AIR 研究会・トークショーに参加して—

アーティスト・イン・レジデンスには地方創生、人材育成、国際交流など、非常に多くの期待が寄せられています。日本における認知度は決して高くなく、運営団体の資金や人手も決して潤沢であるとは言えません。それぞれに目的も運営方法も異なりますが、自分たちだけで悩んでいたことも、こうしたつながりがあることで、アドバイスやヒントを得ることができます。益子国際工芸交流事業は 2014 年 5 月に始まりましたので、本研究会に参加している団体の中では最も“若手”であり、他団体の先輩方から多くのことを学ばせていただいています。（陶芸の森は 1992 年～、瀬戸市新世紀工芸館・京都芸術センターは 2000 年～）

1 月に瀬戸で行った研究会では、「アーティスト・イン・レジデンスの本質とは何か」という議論の中で、“プロである作家が新たな環境に身を置きレベルアップする場”、“作家の未来につなげる場”という言葉がありました。益子国際工芸交流事業ではコンセプトに「地元作家のレベルの底上げ」を掲げていますが、私たちの事業は“滞在作家と地元作家のための事業”であるということを改めて確認することができました。これからの滞在作家にとって益子の経験がよりよいものになるように、事前に作家が益子で何をしたいのか、それが可能なのかなど、よくコミュニケーションをとった上で準備を進め、技術面では工房スタッフが原料や制作の知識と経験を積むと同時に、地元作家や他の関係機関の協力を得られるようなつながりを作っていきたいと考えています。また、事業に関わって（参加して）くれる地元作家を増やすことも私たちにとって大きな課題ですが、交流イベントの日程や事前の広報の仕方を見直し、私たち自身が地元作家の展示に足を運び情報を得ていくなどの努力をしていくことも必要だと感じています。地元作家が外に目を向け、滞在作家から“何か”を吸収していくことは、地元作家のレベルを上げていくことにつながると信じ、益子らしいアーティスト・イン・レジデンスを確立していけたらと思います。

京都芸術センターはビジュアルアーツからパフォーミングアーツまで、現代の芸術表現を行うアーティストを主な対象にアーティスト・イン・レジデンスプログラムを運営しており、その成り立ちや設備も含め、この研究会に参加している。主に工芸に特化したレジデンスプログラムを運営する団体とは異なる部分が多かった。しかしながら、回を重ねることで互いのオリジナリティや独自性を知るとともに、共通点も浮かび上がってきたように思う。それらを整理してまとめ、お互いのプログラムへ還元していくためにはもう少し回を重ねていく必要があるかと思うが、本年度互いの街を訪問し、施設を見学させていただきながら担当者の方々が抱える課題を共有できたことは、私たちにとっても自身の活動を振り返るという大きな機会となった。京都芸術センターではプログラムの内容が多様化しており、この研究会に参加されている専門的な施設と連携していくことで拡がる可能性について、今後も研究会で議論していきたい。

（公財）瀬戸市文化振興財団

山崎 真以

A I Rの目指すところと事業評価

A I Rの実施によって何をを目指すのか。地域における国際交流なのか、地元作家が外国人作家との交流によって創作活動に新たな視点を取り入れることなのか。それによってどのような事業を展開していくのか、何を以てA I Rを成功とするのかが変わってくるのだと改めて感じさせられた。今回の研究会でも、A I Rの評価指標の設定の難しさが議題として挙げたが、各実施団体がA I Rを通じて目指すものが違う中、共通の評価指標を設定するのは難しいと感じた。しかしながら、評価指標を設定し、達成度合に応じて事業の改善、異なる事業の展開を行っていくことはA I Rを継続・発展させていくために必要不可欠であり、今後の課題として研究会での議論を通じて各施設が適切に評価指標を設定していけたらと感じている。

また、目指すところは違っても、A I Rの運営において根底の部分では共通の想いや課題を抱えていることが分かったので、今後も研究会にて議論を深め、より良い事業を実現できるようにしていきたい。

陶芸の地におけるアーティスト・イン・レジデンスの可能性

菅野幸子

AIR Lab アーツプランナー / リサーチャー

アーティスト・イン・レジデンス（以下、「AIR」）とは、アーティストを始めとするあらゆる創作活動に関わる多様なクリエイター、キュレーター、リサーチャーが異なる文化背景の下で、さらなる高みを目指して表現の腕を磨き、言葉だけではないコミュニケーションを通じ、その地の人々と多様なネットワークや人脈を築き、成長することを支援するプログラムである。その原点は、1666年、フランスの王立アカデミーがローマ賞を授与した新進気鋭のアーティストを当時最先端の文化を誇っていたローマにあるヴィラ・メディチに派遣したことに遡る。すなわち、若手アーティストたちにとっては、武者修行の場に派遣され、研鑽する機会となる。以来、ヴィラ・メディチは、現在に至るまでフランスから派遣されたアーティストたちが滞在するAIRの原点の地として長年の歴史を誇っている。

東洋のヴィラ・メディチの役割を担って建設されたのが、京都にあるヴィラ九条山である。京都にはドイツ政府の国際文化交流機関のゲーテ・インスティテュートが運営するヴィラ鴨川が、越後妻有にはオーストラリア政府が運営するオーストラリア・ハウスがある。これは、日本という地が、アーティストやクリエイターにとって、創作の場として、新旧の多彩な文化が混在する魅力ある国として捉えられているという証左でもあろう。

また、ベルリンのクンストラーハウス・ベタニエン、パリのシテ・デ・ザール、アムステルダムライクス・アカデミー、ロンドンのアクメ・スタジオなどでは、海外のAIRや国際文化交流機関と相互交流の協定を提携して、定期的に交流しており、数多くのアーティストたちを相互に受け入れている。AIRは、国際文化交流の原点でもある。なによりも、AIRは、異なる文化背景を持つアーティストたちが集まり、情報や技術を交換し、寝食を共にし、互いに刺激し合い、切磋琢磨する場であると同時にさまざまな表現や手法を試す実験の場でもある。

多彩なプログラムや機会を提供するAIRは、現代にあってもますます重要となっている。なぜならば、アーティストやクリエイターたちは、常に国や地域や文化など様々なボーダーを超え、創造に向き合ってきた。国際的な共同制作、共同プロジェクト、トリエンナーレやビエンナーレといった国際芸術祭などがますます増えている現在、多様なクリエイターたちの国際的な移動を支えるシステムとしても必要不可欠となっている。アーティストたちにとっても、美術館やギャラリーでの展示、作品購入だけでなく、どのAIRで滞在創作活動を行ったかも重要なキャリアとして評価されている。創作に集中できるAIRは、アーティストたちにとっても貴重な時間であり機会でもある。同時に、出会いとチャンスのある場でもある。現代のアーティストたちにとってはAIRに参加することは極めて自然な創作活動の一部となっている。異なる文化背景で創作することは、アーティストたちにかげのない経験と刺激をもたらす。自らを見つめ直し、新しい価値観を知る機会ともなるからである。

2017年から18年にかけて、滋賀県立陶芸の森、益子国際工芸交流館 / 益子陶芸美術館、瀬戸市新世紀工芸館、京都芸術センターが連携して、アーティスト・イン・レジデンスの意義を改めて考える研究会が3回開催された。第2回の益子陶芸美術館での研究会では、濱田庄司の家であった参考館を訪問する機会に恵まれた。想像を超える屋敷の広さと美しい自然に囲まれた創作環境に圧倒された。濱田が世界各地から集めたコレクションが、また素晴らしい。濱田は、イギリスの陶工バーナード・リーチとの交流でも知られる。濱田はリーチが窯を構えたセント・アイヴズに滞在し、また、リーチは益子の濱田を訪ね、友情と交流を育んだ。さまざまな技術や表現を実験し、議論を交わし、互いに作品を創り上げていた。まさにAIRの原点である。この精神を継ぐかのように、益子国際工芸交流館 / 益子陶芸美術館では、イギリスから陶芸家が益子に招かれ創作活動を行っている。陶芸専用のスタジオ空間と居住空間が備えられ、充実した設備となっている。

日本の陶磁器の産地は全国各地に散在し、芸術として、また産業としても発展してきており、その種類の豊かさと技術の高さ、確かさは世界に類を見ない。歴史的にも重要な輸出品としても幾つもの海を超え、世界各地に伝えられ、愛用されてきた。現在、日本の陶磁器の産地は時代や生活スタイルの変化から、かつての勢いは少し影を潜めているようにも思われる。しかし、それゆえに、実験の場であり、ともにアイディアや議論を交わし、新しい価値を提示できるAIRというプログラムには、陶磁器の新しい魅力や価値を引き出す大きな可能性が潜在しているのである。

AIR の発展と持続可能な運営のために

日沼禎子

女子美術大学准教授 / AIR ネットワークジャパン事務局

アーティスト・イン・レジデンス（AIR）、すなわち、移動しながら創作活動を行うアーティストの支援と受け入れのプラットフォームは、文化芸術による地域づくりへの取り組みとして全国で盛んに実施されている芸術祭（トリエンナーレ、ビエンナーレなど）と同様に、多様化、発展してきている。しかし実態としては、運営する組織・団体によって目的や期待する成果が異なることから、AIR の定義や評価基準を定めることは難しく、社会装置としての意識はあるものの、美術館や劇場等にくらべ、その顕在化はまだまだ途上であり、多くの AIR は不安定な運営状況であると考えられる。一方、一元的な定義がないからこそ、組織・団体ごとの自由な発想による事業展開、アーティストの表現活動や交流の場が具現化できるという魅力、可能性は大きく、その多様さを強みとしながら、継続可能な運営、プログラム発展のためには、社会的認知を広めること、その意義と成果を言語化し、発信することが重要な課題であると考えられる。

AIR ネットワークジャパンでは、それらの課題を解決し、共有するための国内外のネットワーキングの必要性を前提とし、AIR の持続的展開へ寄与するべく、国内の AIR 実施者、研究者が集まり、2015 年 11 月に発足した。「多様な AIR のケーススタディと課題抽出」、「課題解決と AIR 事業発展への支援」、「社会基盤としての AIR のプレゼンス向上」、「国・自治体による政策へのアドボカシー」などの活動を具体的な役割とし、AIR の主役であるアーティスト、受け入れを行う現場担当者、研究者等とのフェイス・トゥ・フェイスでの話し合いの場づくりを中心にゆるやかな活動を行っており、今後は、シンクタンク機能、アーカイブ機能を持った組織への発展に向けて議論、準備をしているところである。

この度参画させていただいた本 AIR ネットワーク研究会は、やきもの（陶磁器、ガラス）制作を行うアーティストを対象とした 3 つの館の現場をつなぎ、各地での議論を通した課題と成果の共有を行うという試みであった。それぞれ、やきものの産地であることを背景に、それぞれの地域の過去・現在・未来を見つめ、新たな創造や産業の発展へむけたチャレンジの場をつくり、国内外を問わず優れた技術と感性を次世代に継承するための、大変豊かなプログラムが実施されていた。当然のことながら、歴史、風土、AIR 実施に至るプロセスは異なるが、そこに敢えてやきものという共通したフレームを設けることにより、それぞれが抱える課題を丁寧に抽出することができた。また、各開催地がホスト館となって参加者を受け入れ、相互を訪問し合うことで、現場の実際についてより深く理解し、親密な対話がもたらされ、夜の交流会に席を移しても熱い議論が交わされた。また、本研究会で最も意義深かったことは、担当者自身が自らの活動を客観的に省み、積み上げてきた成果、価値、地域の豊かさについて再発見したことであり、AIR を通したアーティストの経験を、担当者自身が追体験の場となったことである。アーティストと地域の人々との国際文化交流やコミュニケーション、アイデアや技術の交換と共同作業を通じた伝統工芸、地場産業の活性化は、将来、世界的な発信力に繋がる大きな可能性を秘めている。

また、AIR ネットワークの中で注目すべき活動として、小規模かつ質の高い AIR をつなぐ「マイクロレジデンス・ネットワーク」や、AIR と芸・美術大学とが連携して若手アーティストおよび学生への支援を目的とした「マイクロとマクロの協働／Y-AIR 構想」がある。これらは、AIR の主役であるアーティストおよび次世代の AIR マネージャー、コーディネーターという人材育成に主眼を置いた活動である。「Y-AIR 構想」については、現在、遊工房アトスペースと東京藝術大学（O-JUN 研究室）、女子美術大学（アートプロデュース表現領域研究室）との実践的な研究活動から生まれたものである。これまで実施してきた事例としては、AIR 滞在アーティストによる美大への講義、ワークショップの実施。在学生在が AIR プログラムを体験・実習するインターンシップ制度。海外の美大が実施する国際アートキャンプ（夏期講習）へ講師として日本からアーティストを派遣。同じくアートキャンプに参加する日本の美大生への支援を行うなどの国際交換プログラムがある。これらのケースは、やきものの産地にとって極めて重要な、次世代の作り手・担い手を育成するプログラムとしても応用でき、日本の伝統工芸の現在を海外に広くアピールする機会につながるものと考えられる。

本研究会を今後も継続することで、AIR 通した多様な交流、資源活用、から生まれる新たな文化芸術の創造に向けたより良い仕組みづくりを、共に目指していきたい。

スケジュール

第1回 | 滋賀県立陶芸の森

平成29年9月9日(土)・10日(日)

【研究会】

開催日時 | 9月9日(土)

開催場所 | 滋賀県立陶芸の森 / 創作研修館 / 視聴覚室

司会進行 | 杉山道夫(滋賀県陶芸の森次長(兼)創作研修課長)

モデレーター | 菅野幸子(AIR Lab アーツ・プランナー/リサーチャー)
日沼禎子(女子美術大学准教授)

1) 事業説明、プレゼンテーション

益子国際工芸交流館 | 月村真由美(益子国際工芸交流事業担当)

京都芸術センター | 平野春菜(AIR担当コーディネーター)

滋賀県立陶芸の森 | 杉山道夫(滋賀県陶芸の森次長(兼)創作研修課長)

瀬戸新世紀工芸館について | 田中良和(元瀬戸新世紀工芸館レジデンス受入担当)
(仮称)奈良県国際芸術家村について(畑主任主事)

2) 討議「アンケート調査から見えるAIR事業の課題について」

【トークショー | 益子×瀬戸×信楽】

開催日時 | 平成29年9月10日(日)13時～

開催場所 | 滋賀県立陶芸の森 創作研修館視聴覚室

あいさつ | 川口雄司(滋賀県陶芸の森 理事長)

司会進行 | 安藤祐輝(滋賀県陶芸の森 指導員)

参加者数 | 30人

1) 「フィラデルフィア芸術大学及びV&A博物館でのレジデンスプログラム」
榎本佳子(陶芸家、元陶芸の森スタジオ・アーティスト)

2) 「レジデンスが自分に与えた影響」
田中良和(陶芸家、元・瀬戸市新世紀工芸館レジデンス受入担当)

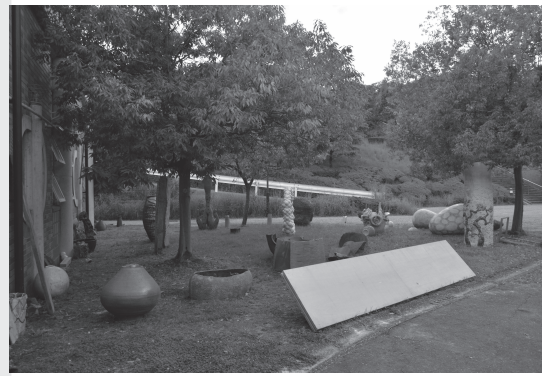
3) 「挑戦する意欲と、守るころ」
濱田友緒(陶芸家、濱田庄司記念益子参考館館長)

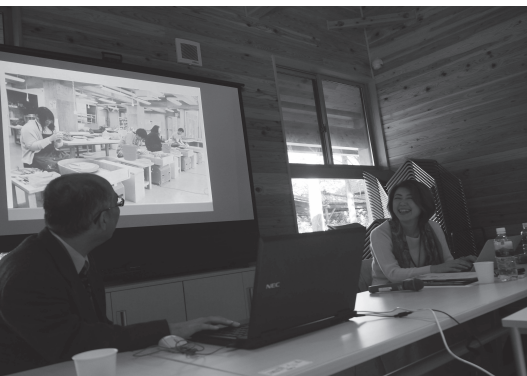
【エクスカーション】

開催日時 | 9月10日(日)10:00～

近隣施設見学(伝統産業会館、高橋楽齋工房、信楽町長野地区、窯元散策路、
信楽町長野商店街内「FUJIKI」)

園内見学 陶芸館「特別企画 十人陶色ー豊かな色の世界」、窯の広場、信楽産業展示館
「しがらき学ノススメ」





第2回 | 益子陶芸美術館／陶芸メッセ・益子

平成29年11月11日(土)・12日(日)

【研究会】

開催日時 | 11月11日(土)

開催場所 | 益子国際工芸交流館

司会進行 | 月村真由美(益子陶芸美術館)

あいさつ | 法師人 弘(益子陶芸美術館館長)

モデレーター | 菅野幸子(AIR Lab アーツ・プランナー／リサーチャー)

日沼禎子(女子美術大学准教授)

1) 課題と共有～各館プレゼンテーション

益子陶芸美術館 | 月村真由美(益子陶芸美術館／陶芸メッセ・益子)

瀬戸市文化振興財団 | 服部文孝(公益財団法人瀬戸市文化振興財団 瀬戸市交流活力部文化課課長・瀬戸市美術館館長)

滋賀県陶芸の森 | 松波義実(滋賀県陶芸の森主査)

2) 討議「AIRの課題と共有～特に「陶芸」分野において」

- ・現在の課題の共有
- ・多彩な技術と産地におけるAIRの役割、可能性
- ・AIRの事業としてのサステナビリティを考える～経済、地域活性、評価、観光、デザインなどの観点から

【トークショー | 信楽×益子】

開催日時 | 11月12日(日)13時～16時

開催場所 | 濱田庄司記念 益子参考館

あいさつ | 法師人 弘(益子陶芸美術館館長)

司会進行 | 月村真由美(益子陶芸美術館)

参加者数 | 60人

1) 「自身の制作とヨーロッパ・セラミック・ワークセンターについて」
ジョリス・リンク(オランダ、陶芸の森文化庁補助事業招へい者)

2) 「自身の制作とセント・アイヴィス、リーチ工房での経験について」
ジョン・ベディング(イギリス、益子国際工芸交流館招へい作家)

3) 座談会「レジデンスについて」

司会進行：濱田友緒(濱田庄司記念益子参考館館長)

ジョリス・リンク

ジョン・ベディング

杉山道夫(滋賀県陶芸の森次長(兼)創作研修課長)

【エクスカーショーン】

開催日時 | 11月12日(日)9:00～

益子陶芸美術館(企画展「瀧田項一の歩み 作陶七十年のかたち」、薪窯、登り窯、陶芸工房)、濱田庄司記念 益子参考館、道の駅ましこ

第3回 | 瀬戸市新世紀工芸館

平成30年1月20日(土)・21日(日)

【研究会】

開催日時 | 1月20日(土) 13:00～

開催場所 | 瀬戸市新世紀工芸館

あいさつ | 服部文孝(瀬戸市美術館館長)

司会進行 | 山崎真以(公益財団法人瀬戸市文化振興財団)

モデレーター | 菅野幸子(AIR Lab アーツ・プランナー／リサーチャー)
日沼禎子(女子美術大学准教授)

1) 各館プレゼンテーション

益子陶芸美術館 | 大西昌子

滋賀県陶芸の森 | 佐々木翔

京都芸術センター | 勝冶真美

瀬戸市新世紀工芸館 | 山崎真以

2) 討議「AIRの課題と共有～特に「陶芸」分野において」

- ・多彩な技術と産地におけるAIRの役割、可能性
- ・AIRの事業としてのサステナビリティを考える～経済、地域活性、評価、観光、デザインなどの観点から
- ・次年度のネットワーク研究会継続も視野にいれながら各館が連携して行う、具体的なネットワーク事業の提案について

【トークショー | 京都×益子×瀬戸】

開催日時 | 平成30年1月21日(日) 13時～

開催場所 | 瀬戸市新世紀工芸館

あいさつ | 服部文孝(瀬戸市美術館館長)

司会進行 | 山崎真以(公益財団法人瀬戸市文化振興財団)

参加者数 | 40人

- 1) 「自分自身のレジデンス経験と作品について～韓国、アメリカ、東京、京都」
キム・ジェウオン(現代芸術家、韓国、京都芸術センター招へい作家)
- 2) 「地域から見たレジデンス」
岩見晋介(陶芸家、益子在住)
- 3) 「アーティスト・イン・レジデンス等の海外経験」
竹内真吾(陶芸家、瀬戸市在住)

【エクスカーション】

開催日時 | 1月21日(日) 9時～12時

瀬戸市美術館、新世紀工芸館、瀬戸蔵ミュージアム、他



研究会出席者

菅野 幸子 (AIR Lab アーツ・プランナー／リサーチャー)
日沼 慎子 (女子美術大学准教授 芸術学部アート・デザイン表現学科 アートプロデュース表現領域)
山田 早苗 (女子美術大学芸術学部アート・デザイン表現学科 アートプロデュース表現領域研究室助手)
飯島 早矢加 (女子美術大学芸術学部アートプロデュース表現領域研究室 3 年)
遠藤 初穂 (女子美術大学芸術学部アートプロデュース表現領域研究室 3 年)
月村 真由美 (益子陶芸美術館／陶芸メッセ・益子)
松崎 怜子 (益子陶芸美術館／陶芸メッセ・益子)
阿部 智也 (益子陶芸美術館／陶芸メッセ・益子)
大西 昌子 (益子陶芸美術館／陶芸メッセ・益子)
服部 文孝 (公益財団法人瀬戸市文化振興財団 (瀬戸市交流活力部文化課課長・瀬戸市美術館館長))
山崎 真以 (公益財団法人瀬戸市文化振興財団業務課主事)
屋我 優人 (瀬戸市新世紀工芸館 陶芸研修担当)
伊藤 弘彦 (瀬戸市新世紀工芸館 ガラス研修担当)
勝冶 真美 (京都芸術センタープログラムディレクター)
平野 春菜 (京都市芸術センターアーティスト・イン・レジデンスアートコーディネーター)
森野 泰起 (公益財団法人滋賀県陶芸の森事務局局長兼学芸課長)
杉山 道夫 (公益財団法人滋賀県陶芸の森次長 (兼) 創作研修課長)
松波 義実 (公益財団法人滋賀県陶芸の森創作研修課主査)
安藤 祐輝 (公益財団法人滋賀県陶芸の森創作研修課指導員)
佐々木 翔 (公益財団法人滋賀県陶芸の森総務課主事)

オブザーバー

奈良県地域振興部 国際芸術家村整備推進室 畑 沙織 主任主事
奈良県地域振興部 文化振興課 武藤 裕貴 主事

編集後記

山田 早苗 (女子美術大学 芸術学部アート・デザイン表現学科 アートプロデュース表現領域研究室 助手)

この度のアーティスト・イン・レジデンス研究会+トークショーでは、国内の4つのAIR運営施設のスタッフの皆様が集結し、各館の特徴や運営上の現状、課題等について情報の共有を行い、各地域の特色を生かしたより良いレジデンスの方向性を検討しあうことができ、今後のAIRの発展につながる大変貴重な機会となったことと実感しております。各館の運営体制や抱える課題は異なったとしても「熱心なアーティストを最大限に支援し、芸術による文化交流の可能性を広げる」という大きな目標は共通しており、現代社会の様々な事柄を広い視野で見極め、地域の方とアーティストの双方の目線に立ったスタッフの皆様のきめ細やかな姿勢が真に伝わるお話を多々拝聴いたしました。ご関係の皆様にあたたく強い思いこそ、レジデンスの未来、さらには芸術の表現活動における素晴らしい未知の可能性の根源となっているのではないのでしょうか。

今後もこうした共通意識を持つ皆様の活発なネットワークが構築され、魅力的な文化交流、表現の場が展開されますよう願っております。本研究会+トークショーにご参加された皆様、ご登壇されたアーティストの皆様、本報告書の編集に多大なご協力を賜りましたご関係の皆様様に心より御礼申し上げます。

飯島 早矢加 (女子美術 大学芸術学部アート・デザイン表現学科 アートプロデュース表現領域研究室 3 年)

この度はアーティスト・イン・レジデンス研究会に参加させていただき、誠にありがとうございました。大学の授業だけでは経験することのできない学びを得ることができました。心から感謝申し上げます。

また、報告書の作成にも関わらせていただけたこと、大変嬉しく、学びの多い時間となりました。 至らないところもございましたが、みなさまのお力添えをいただきながら、無事に編集を終えることができました。

報告書を作成する際には、公益財団法人 滋賀県陶芸の森 次長 (技術) 兼創作研修課長でいらっしゃる杉山様が研究会の際におっしゃっていたお言葉を大切にいたしました。『どんな事業でも行ったことをしっかりとまとめて、伝達することが大切である』というお言葉です。この度の研究会参加者の皆様のお声や想いが届く、そんな報告書にしたいと努力いたしました。報告書を通して研究会の成果が多くの方に伝わり、感じていただければ幸いです。

遠藤 初穂 (女子美術 大学芸術学部アート・デザイン表現学科 アートプロデュース表現領域研究室 3 年)

今回、編集を務めさせていただきました。アーティスト・イン・レジデンス研究会とトークショーでは、非常に興味深いお話を、それぞれの立場から生の声で聴ける貴重な体験をすることが出来、充実した時間を過ごすことが出来ました。研究会の中で印象的だったのは成功事例だけでなく、失敗事例なども議論の中で上がっていて、なぜその事例が上手くいかなかったのか、どの部分に気をつけなければいけないのかその事例からの考察を詳しく丁寧にされていたことです。良いところだけを言う上辺のみではない本音での議論の方法を拝見することが出来て勉強になりました。

原稿依頼を快くお引き受けくださった執筆者の方々、また、バックアップしてくださった方々に心からお礼を申し上げます。任務を終えてほっとするとともに、大学生活の中では得られない貴重な経験をさせていただきました。一人でも多くの方に、今回の研究会の内容及現在のレジデンスの実態が分かりやすく伝わる報告書になることを期待しています。

主催 |

公益財団法人 滋賀県陶芸の森

開催協力 |

益子国際工芸交流館／益子陶芸美術館

公益財団法人 瀬戸市文化振興財団

公益財団法人 京都市芸術文化協会

発行日 |

平成 30 年 2 月 28 日

発行者 |

公益財団法人 滋賀県陶芸の森

編集 |

女子美術大学 芸術学部 アート・デザイン表現学科 アートプロデュース表現領域研究室

公益財団法人 滋賀県陶芸の森

協力 | Beans -for your solutions- 荒井 恭子

助成 |

平成 29 年度文化庁アーティスト・イン・レジデンス活動支援を通じた国際文化交流促進事業

